

平成19年度

総合的な学習の時間コーディネーター養成講座

実施報告書

香川県教育委員会

は じ め に

総合的な学習の時間の全面実施から6年が過ぎようとしています。この間、本県の小・中学校では、特色ある学校づくりをめざし、その趣旨やねらいを踏まえた多様な学習活動が展開されているところです。

こうした中、総合的な学習の時間の成果や課題については、平成19年4月24日に実施された全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙調査の結果からも推し測ることができます。これによると、「総合的な学習の時間の授業では、新しいことを発見できる」「総合的な学習の時間の授業で学習したことは、ふだんの生活や社会に出たときに役に立つと思う」で肯定的に回答した割合は、小・中学生ともに全国平均を上回っておりますが、「総合的な学習の時間の勉強は好きだ」「総合的な学習の時間の授業で学習したことによって、ほかの教科の授業も分かりやすくなったと思う」では、小学生が全国(公立)を下回っております。

また、平成20年1月17日に中央教育審議会の答申が公表されましたが、その中で、総合的な学習の時間の改善の具体的事項として、「総合的な学習の時間については、その課題を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能の定着やこれらを活用する学習活動は、教科で行うことを前提に、体験的な学習に配慮しつつ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な活動となるよう充実を図る。」と述べられております。

こうした、中央教育審議会の答申や、全国学力・学習状況調査の本県児童生徒の回答状況からも、総合的な学習の時間と他教科のねらいや相互の関連を明確にした総合的・横断的な学習の充実を図っていくことが、今後の課題であると考えているところです。

さて、「総合的な学習の時間コーディネーター養成講座」については、昨年度から文部科学省の委託事業として、「学校として総合的な学習の時間に組織的に取り組むための企画・調整を担うコーディネーターを養成し、その成果の普及を図ることにより、総合的な学習の時間の一層の充実に資すること」を趣旨として開催しているものであります。

本年度は、県内の小・中学校の70名あまりの先生方を対象に、総合的な学習の時間の工夫改善について、講義、ワークショップ、講演の聴講など多様な形式を取り入れ、4回の養成講座を実施いたしました。

本実践報告書は、その4回の養成講座に参加した先生方の研修レポートを中心に構成しています。総合的な学習の時間のコーディネーター養成を目的とした内容ではありますが、各学校の今後の総合的な学習の時間の在り方を示唆するものであり、実践の参考になると考えております。ぜひ、本実践報告書を活用いただき、自校の総合的な学習の時間の一層の充実に取り組んでいただくことを願っております。

最後になりましたが、本講座を実施するに当たって、香川大学教育学部 松本 康教授、香川県教育センターには多大な御協力をいただきましたことに感謝を申し上げます。

平成20年3月

香川県教育委員会事務局義務教育課

課長 吉田光成

目 次

はじめに

目 次

平成19年度香川県「総合的な学習の時間コーディネーター養成講座」実施要項 …… 1

平成19年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座日程 …… 3

第1回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から …… 5

- ・総合的な学習の時間の歴史
- ・総合的な学習の時間の現状と課題
- ・計画作成とコーディネーターの役割

第2回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から …… 13

- ・授業の実施とコーディネーターの役割 1
- ・授業の実施とコーディネーターの役割 2

第3回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から …… 21

教育講演から学ぶ

第4回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から …… 29

- ・カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 1
- ・カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 2
- ・個人カルテ（抽出児の指導、抽出児の記録と評価）

平成20年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座を受講して …… 39

アンケート結果の概要

この実践報告書は、受講生の研修報告書に記載された内容で大部分を構成しています。記事内容から一部学校が特定される場合もありますが、原則、校名、受講者名をふせていますことをご了承願います。

1 趣旨

県内の各小・中学校の教員等を対象に、学校として総合的な学習の時間に組織的に取り組むための企画・調整を担うコーディネーターの養成を行い、その成果の普及を図ることにより、総合的な学習の時間の一層の充実に資する。

2 主催

文部科学省 香川県教育委員会

3 受講者

総合的な学習の時間コーディネーターとして、各教育事務所が推薦した学校の教務主任、現職教育主任、総合的な学習の時間担当者のうち、1名。ただし、4日間の講座をすべて受講できる者。

4 受講者の推薦手続等

- ・ 各教育事務所は、管内の小中学校において積極的に総合的な学習の時間を推進している学校及びその学校の受講者1名を選定し、別紙様式1により義務教育課に提出する。
- ・ 義務教育課は、推薦表受理後、受講対象校及び受講者を確認し、関係教育委員会、関係小・中学校、各教育事務所に通知する。

5 開講日

香川県教育委員会において別途定める。

6 研修講座の内容

(1) 総合的な学種の時間の意義、現状と課題に関すること

- ・ 総合的な学習の時間の教育課程上の位置付け、趣旨、ねらい
- ・ 総合的な学習の時間の現状と課題
- ・ 総合的な学習の時間におけるコーディネーターの役割

(2) 計画作成とコーディネーターの役割に関すること

- ・ 全体計画、指導計画の作成
- ・ 校内体制の整備、校内組織の作り方、校内研修の進め方
- ・ 施設・設備などの学習環境の整備・活用
- ・ 地域人材の活用、地域との連携、学校外との調整の進め方

(3) 授業の実施とコーディネーターの役割に関すること

- ・ 教材の開発

- ・ 指導方法や指導評価の工夫
- (4) カリキュラム評価・改善とコーディネーターの役割に関すること
- ・ 評価資料の収集・検討
 - ・ 改善案の作成・検討

7 研修講座の重点事項等

- (1) 研修講座は、6の(2)の「計画作成とコーディネーターの役割に関すること」を重点とする。
- (2) 実施にあたっては、演習を取り入れたり、公開授業の参観を取り入れたりするなど運営を工夫する。
- (3) 研修講座の事前事後にアンケート(意識調査)を実施し、研修講座の評価を実施する。
- (4) 受講生は、毎回の研修後に研修報告書を、研修終了後決められた期日までに実践記録を提出する。研修報告書、実践記録の様式は別途周知する。

8 経費

文部科学省は、本講座の実施に要する経費について、県に対し予算の範囲内で支出する。この経費は、県が行う国の会計事務として支出する経費とする。ただし、受講生の旅費は含まれない。

9 その他

- (1) 香川県教育委員会事務局義務教育課は、文部科学省の求めがあれば、本講座の進捗状況及び経費事務処理状況について事態調査を受ける。
- (2) 香川県教育委員会事務局義務教育課は、文部科学省が行う特に効果的な研修の事例の収集やその公開及び共有について協力する。
- (3) この要項に定めのない事項で事業の実施に必要な事項は、香川県教育委員会事務局義務教育課長が別に指示する。

平成19年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座
第1回・2回 日程

第1回 8月1日(水) 9:30~16:30 (会場:香川県民ホール 玉藻)		第2回 8月2日(木) 9:30~16:30 (会場:高松テルサ 大会議室)	
時間	内 容	時間	内 容
9:30	受付	9:30	受付
9:45	開会 研修の趣旨説明 研修日程について	9:45	開会 日程説明
10:00	研修1「総合的な学習の時間の歴史」 指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授	9:55	研修4「授業の実施とコーディネーターの役割 1」 ・授業実践の情報交換 ・授業実践上の課題把握 事例分析・課題把握 ワークショップ
11:00	休憩		
11:15	研修2「総合的な学習の時間の現状と課題」 ・中教審の審議から ・県内の実施状況 ・コーディネーターに期待すること 指導・助言 義務教育課 担当指導主事		指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授
12:00	昼食・休憩	12:00	昼食・休憩
13:00	研修3「計画作成とコーディネーターの役割」 ・全体計画、年間指導計画の作成上の工夫・改善 ・目標及び内容 ・育てようとする資質や能力 ・指導体制 ・各教科等との関連 ・各学年間との関連 ・小中との関連 指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授	13:00	研修5「授業の実施とコーディネーターの役割 2」 ・教材の開発 ・指導の工夫改善 指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授
16:30	事務連絡・閉会	16:30	事務連絡・閉会

平成19年度総合的な学習の時間コーディネーター養成講座
第3回・4回 日程

第3回 10月11日(木) 12:45~16:30 (会場:香川県教育センター 大研修室)		第4回 12月26日(水) 9:30~16:30 (会場:高松テルサ 大会議室)	
時間	内 容	時間	内 容
12:45	受付	9:30	受付
13:00	研修6「教育講演から学ぶ」 (県教育センター教育講演) 講演 演題 (未定) 講師 鳴門教育大学 村川雅弘 教授	9:45	開会 日程説明
		9:55	研修7「カリキュラムの評価・改善 とコーディネーターの役割 1」 ・児童生徒の評価の在り方 実践事例の情報交換 評価方法の工夫改善 指導・助言 義務教育課 担当指導主事
		12:00	昼食・休憩
		13:00	研修8「カリキュラムの評価・改善 とコーディネーターの役割 2」 ・カリキュラム評価の在り方 総合的な学習の時間の評価 次年度構想案の作成・検討 ・校内体制の整備、校内の組織・ 校内研究の進め方 指導・助言 香川大学教育学部 松本 康 教授
		16:00	研修のまとめ アンケートの実施
16:30	閉会	16:30	閉会

第1回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

平成19年 8月1日(木) 9:45~16:30

香川県県民ホール 玉藻

講座の内容

- 1 講話 総合的な学習の時間の歴史
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏
- 2 講話 総合的な学習の時間の現状と課題
香川県教育委員会事務局義務教育課 担当
- 2 講話・演習 計画作成とコーディネーターの役割
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏

総合的な学習の時間の歴史

講師 香川大学教育学部 教授 松本 康 氏

講話 「総合的な学習の時間の歴史」

総合的な学習の時間の歴史について、現在実施されている総合的な学習の時間の設立の経緯や、合科学習、総合学習、クロスカリキュラムの違い、明治期、大正期から行われている先進的取組等について講話いただいた。

ここでは、その講話内容や感想をまとめた報告書を紹介します。

研修(講話から学んだこと)

総合的な学習の時間の歴史は明治時代にさかのぼり、合科学習から統合した学習へと移行して、1998年から現在の総合的な学習の時間に至ったことから、15年前に試みた合科(音楽・美術・技家)の研究授業を思い出した。いまだに続く試行錯誤は、生徒が興味を持って主体的に取り組むことができる魅力ある題材の設定や、教師の力量・教師間の組織連携に問題があるように思われた。

また、総合的な学習の時間では『自ら学ぶ、考える、学び方や生き方を考える』ことが大切である。しかし、子供の生活の変化から、自ら学び生活と結びつけた考えや学習活動ができないという問題があり、早急に改善すべき点が具体的に上げられてわかりやすかった。各教科との関連付けが細部まできちんと把握できていない現状もわかった。

(高松市：中)

マンネリ化の打開に向けて

学校で年間計画もでき、児童の実態に応じて少しずつ変えながらも、毎年同じ内容のカリキュラムで総合的な学習が行われている。今日の講座で総合的な学習の歴史やねらいを改めて聞き、今、マンネリ化になっているカリキュラム、内容について見直す必要性を感じた。

(高松市：小)

「的」の意味は・・・

日頃から、どうして「総合学習」ではなくて「総合的な学習」となるのか疑問に思っていました。が、「的」の意味を明確に教えていただきました。「合科学習」「総合学習」「クロス・カリキュラム」と「総合的な学習」には3つの学習スタイルがあります。これまで自分が実践してきたのは「総合学習」だけだったように思うので、これからは、「合科学習」や「クロス・カリキュラム」も含めてもっと広く多角的に「総合的な学習」をとらえて、実践していきたいと思います。また、明治期より合科・総合学習が考案、実践されていたことに大変驚きました。奈良女附小の自律的学習方法の詳しい紹介がありましたが、長い歴史の歩みの中で多くの教師が試行錯誤しながら実践に実践を繰り返した上に、今日の「総合的な学習」があることを知りました。奈良女附小の自律的学習方法から、一人一人の調べ学習がしっかりなされた上に相互学習がうまく展開され、仲間と交流した後はまた自分に返っていくことの大切さを改めて確認しました。

(高松市：小)

カリキュラムを工夫する

自ら学び、自ら考え」という考え方は、時代を超えてはるか昔からあり、今までもいろいろ対策が練られていたんだと思った。奈良女附小の自立的学習法や伊那小の総合学習と教科学習のAからFまでの考え方を知って、一つだけの考えにこだわらずカリキュラムを考えていけば今より時間の余裕が生まれるし、子どもの意欲の持続がはかれると思われる。だが、学級の年間計画を音楽や図工にまですべての教科に取り入れ、子どもの課題意識によって作っていく柔軟なカリキュラムを組むことは、実際には、難しい。

(三木町：小)

計画づくりに生かす

この研修では、総合的な学習の時間の歴史について学んだ。特に明治時代からすでに効果的な学習として総合学習の試みが始まっていたことに驚いた。また、大正から昭和の初めにかけて奈良女附小の木下竹次先生の子どもの目線に立った自律的学習法は、これから私たちがめざそうとしている総合的な学習に通じる実践である。こうした取り組みがこの時期にこれだけ行われ、現在もその実践が継続されていることは、これから総合的な学習を推進していくのに大きな支えとなると思う。さらに、時代が下り、長野県の伊那小学校の実践は、総合的な学習の進め方のあり方を示唆するものであり、計画づくりににおいて役立てていきたい。

(坂出市：小)

分かっているはずだった総合的な学習

分かっているつもりだった総合的な学習だが、「的」と言う一言に大変複雑な意味があり、今だその意味を十分に理解できていないような気がした。また、学校制度のもつ問題点として、生きた学力になっているか？すなわち身に付けた学力が自分の生活の中に生かしているか？という言葉がとて心に残った。主体的・創造的な学習にするためにも、学校・家庭・地域の協働が大切であると改めて考えさせられた。

奈良女附小の子どもが問いをもち、自力で掘り起こしていくという実践事例を紹介していたので、是非一度は参観してみたいと思う。

(坂出市：小)

学習とは・・・

「学習とは学習者自らが教師指導の下にある整理された環境の中であって自ら機会を求め、自ら刺激を与え、自ら目的と方法を定め、社会に依拠して社会的自我の向上と社会文化の創造を図って行く作用である。」木下竹次先生の学習の目的はまさしくそのとおりである。そして、奈良女子大附属小学校で現在も脈々と受け継がれ、実践されていることがすばらしい。例えば、ポニー飼育についての実践は本当にすばらしいと感じた。しかし、教師の力量が問われることも再確認した。また、朝の「おたずね」を訓練・日常的に行うことで教師が発問するようなことが出てくるとのことでも参考になった。

(善通寺市：小)

総合的な学習の時間のねらい

3つ目のねらいは「各教科や道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能を相互に関連付け・・・それらが総合的に働くようにすること。」であり、生活とのつながりが大切であることが分かった。木下竹次さんの「学習すなわち生活であり、生活直ちに学習となる。日常一切の生活、自律して学習する処、私共はここに立つ。」という総合的な学習の原点を知るとは、今後の指導の上で意義があったと思った。

(琴平町：小)

教師は「環境を整えることが仕事である」

総合的な学習の時間の成り立ちやねらいについてわかりやすく説明をいただいた。私は、総合的な学習と合科学習の違いや、選択教科、特別活動との関連についての疑問をいくつか持っていたが、少し考え方を整理することができた。お話を聞いて、「問題を解決する資質や能力」を育てるとともに、具体的に生活に結び付けて「自己の生き方」に生かしていくことが総合的な学習に求められているものだと感じた。その点で考えると、今行われている総合的な学習は、学校や教師が提示したテーマのもと、生徒が受身的に行っているものが多く、本来のねらいを達成しているかどうか疑わしい。

また、奈良女附小の自律的学習法の中では、相互学習での討議によって独自学習を修正していることや、問うことの大切さを重視している点が非常に参考になった。そして、教師は「環境を整えることが仕事である」ということが、総合的な学習を改善していくキーワードになるように思う。

(三豊市：中)

学習即生活、生活即学習

総合的な学習の時間の必要性やその歴史的な背景等を学び、総合的な学習の時間のねらいや本質を再確認することができた。

特に、木下竹次氏の「学習は、学習者が生活から出発して、生活によって生活の向上を図るものである。」という言葉は、総合的な学習のみならずすべての学習の根幹に通じるものがあり、印象に残った。また、長野県の伊那小の実践において、課題を絞るまでにかかなりの時間をかけるなど、教師は待ちの姿勢を貫き決して引っ張らないという点は、私自身の日頃の実践の反省点であり課題でもあったので、大変参考になった。また、年間学習指導計画の一覧表は、今後の教科の統廃合にも通じるものがあり、大変興味深かった。

(三豊市：小)

総合的な学習の時間の現状と課題

中央教育審議会の答申、審議経過報告から

「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」（平成17年10月26日 中央教育審議会）

総合的な学習の時間については、大きな成果を上げている学校がある一方で、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られる。

また、義務教育に関する意識調査の結果によると、総合的な学習の時間については、全体としては評価は高いが、小学校中学校とでは教師、保護者、子どもの意識や評価に差があることが明らかになった。

思考力、表現力、知的好奇心などを育成する上で総合的な学習の時間の役割は今後とも重要であるが、同時に、授業時数や具体的な在り方については、各教科との関係を明確化するなど改善を図ることが適当である。その際、全国的に一律に定めるのか、学校の裁量による弾力的な取扱いができるようにするのかなどを考慮する必要がある。

また、学習が効果的に行われるよう、学校に対する支援策を充実させることが必要である。さらに、総合的な学習の時間の充実のためには、学校外の人材の協力や地域との連携が重要である。

（第1章（2）教育内容の改善 イ学習指導要領の見直し）より抜粋（下線部後付）

「審議経過報告」（平成18年2月13日 中教審 初等中等教育分科会 教育課程部会）

総合的な学習の時間については、各学校において、例えば、
国際理解、情報、環境、福祉・健康等の教科横断的な学習
子どもによる課題設定と調査研究、作品製作、学習成果の発表会等の学習
自然体験、職場体験、奉仕体験等の学習
などが行われている。

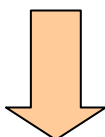
上記については、国際理解、情報、環境、福祉・健康など特定の領域の教育について、関連する教科の内容との関係を整理する必要がある。

上記については、子どもの主体性をはぐくむ上で重要な学習であるが、中学校の選択教科の学習との重なりを指摘する意見があるので、両者の関係を整理し、検討することが必要である。

上記については、子どもの個性を伸ばし、主体性や自立性を高め、目標に挑戦する力を育てていく上で重要な役割を果たすものである。特に、学習面では、課題探究型の学習と結び付くことで、学習意欲の向上にも資するものと考えられる。

その一方、特別活動との関係を整理することが必要である。

（2 教育内容等の改善の方向（1）人間力の向上を図る教育内容の改善 具体的な教育内容の改善の方向（3）総合的な学習の時間などの改善 支援策）より抜粋（下線部後付）



総合的な学習の時間の趣旨やねらいに照らして、学校の取組を検証し、その結果を踏まえて今後の取組の改善を
＝ 総合的な学習の時間のカリキュラムマネジメントを

教育課程や学習指導の改善・充実のための課題例

（平成18年度小中学校教科等担当指導主事連絡協議会資料）から

総則（小中共通）

総合的な学習の時間の趣旨やねらいの実現のための取組の工夫改善

育てようとする資質・能力や各教科等との関連の明確化、学年間の系統性や小・中学校を見通した指導計画の策定、学校として組織的・計画的に取り組む体制の構築、児童生徒一人一人の学習が成り立つ指導の工夫改善、学習状況の適切な評価のための工夫、外部人材との連携協力体制の構築などに配慮する必要がある。

（下線及び番号は後付）

総合的な学習の時間と読解力の育成（「初等教育資料」平成18年5月号、7月号参照）

PISA型「読解力」

PISA型「読解力」とは

「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」

* 文章や資料から「情報の取り出す」ことに加えて、「解釈」「熟考・評価」「論述」することを含む。

* 「考える力」を中核として、「読む力」「書く力」を総合的に高めていくことが重要

平成17年2月 国立教育政策研究所実施「音楽等質問紙調査」における総合的な学習の時間についての結果から

- ・ 子どもは多様な調査方法を身に付けつつあるものの、調べる中で獲得した情報を自らの考えとしてまとめ、発表することは十分身に付いているとは言い難い。
- ・ 一連の学習過程で身に付けた力を生活に生かすまでは至っていない。

総合的な学習の時間における読解力育成（読解力向上に関する指導資料 抜粋）

ア 具体的な体験活動を行う

- ・ 具体的な体験や事物とのかかわりをよりどころとし、感じたり考えたりしながらさまざまな情報を獲得するために、具体的な体験活動を単元に位置付ける

イ 体験を振り返り、そこから情報を取り出す

- ・ 自らの体験を振り返る学習活動を設定したり、意図的な情報提供を行ったりし、体験を対象化し、体験を通して得られる情報を意識するようにする。

ウ 収集した情報の分析や考察を行う

- ・ 収集された情報は、比較、類型、序列などの学習活動を行うことで分析され、子ども一人一人にとって価値ある情報となるようにする。

エ 分析と考察から一般化や概念化を図り、生活に生かす

- ・ 分析した情報を自分自身や実際の体験とのかかわりで一般化や概念化を行うことで、生活に生かすことにつなげていくようにする。

習得型の教育、探究型の教育と総合的な学習の時間

ア 習得型の教育 = 基礎的・基本的な知識・技能の育成

義務教育段階で総合的な学習の時間においても重視したい力に次の4つが考えられる。

- ・ 体験から感じ取ったことを表現する力
- ・ 情報を獲得し、思考し、表現する力
- ・ 知識・技能を実生活で活用する力
- ・ 構想を立て、実践し、評価・改善する力

イ 探究型の教育 = 自ら学び自ら考える力の育成

- ・ 子どもの好奇心を刺激し、学ぶ意欲を高めたり、知識・技能を体験的に理解させる上で重要なことであり、積極的に推進する必要がある。

社会の変化への対応 総合的な学習の時間として取り上げられるであろう内容として社会の変化をどう捉え、どう切り込むかを絶えず考察することが重要である。

総合的な学習の時間の改善のために

- 課題：
- ・ 充実のためには学校外の人材の協力や地域との連携が重要である。
 - ・ 内容の選択、計画、実施、評価まで各学校の力に委ねられており、教師の力量によって学校格差が生じている。

対応： 総合的な学習の時間の推進（平成18年度予算額資料から）

コーディネートの役割を果たす人材の育成・確保、優れた先進事例の情報提供

「総合的な学習の時間コーディネーター」

計画作成とコーディネーターの役割

自校の総合的な学習の時間の取組について、計画の作成や見直しはどのように行われているかについて各学年別のグループで討議した。その後、松本先生から、計画の作成、実行、修正の必要性についてまとめていただいた。

ここでは、研修内容や研修を受けての感想等を紹介する。

総合的な学習の時間の位置付けと計画のレパートリーの蓄積

各中学校の現状、情報交換の中でどこも同じ悩みを抱えている。各校とも、行事を中心とするモデルができあがっており、それを流しているのが現状である。自ら学ぶことの大切さは理解できるが現実問題として、難しい場が多い。生徒の実態からも、自ら学ぶ総合的な計画、実践の難しさを実感している。指導計画の実行と修正により総合的な学習の位置付けをはっきりさせ、計画のレパートリーを蓄積していくことが大切である。また、コーディネーターの役割として現場の職員たちの意識をどう向けていくかも今後の課題かと思う。

(高松市：中)

計画の弾力化に向けて

小学校では、おおむね地域の素材をうまく利用した学年ごとの計画が作られていた。どちらかというと、固定化された計画のため、見直しや変更がしにくいという問題の方が深刻であった。

計画が固定化してしまう原因は、児童の実態把握までに時間がかかり、学年初めの計画がそのまま進行してしまうことや、外部人材との関連で計画を変えづらいこと等があげられていた。

児童の「自ら学ぶ」という視点を尊重し、総合的な学習の時間は自分たちが進めているという自覚ができるように、活動をコーディネートしていくことが大切であると感じた。

(高松市：小)

実態にあった総合的な学習の時間の計画作成とコーディネーターの役割

「どんな力を子どもにつけたいか。」ということを中心に計画を作成し、次に地域の特性や子どもの願いを含んだ計画を作る。そのために必要な配慮として以下の7点がある。

「個の力を育てる」・・・一人調べ、個人研究を丁寧に取り組ませる。安易にグループ活動やグループでの調べを取り入れない。

「テーマ設定を欲張らない」・・・シンプルなテーマからどう発展させていくのか、ある程度子どもが自由に方向を動かせる余裕を持たせる。

「定番メニューに一工夫を加える」・・・毎年同じことをやることになっても、子どもは違うから変化はあるはずである。

「総合的な学習の時間の進行状況が常に見えるようにする」・・・全校的に各学年の学習の進み方や内容を共通理解できるようにすることで、総合的な学習をやりながら学校全体の風通しがよくなるようにする。

「実践レパートリー、教材の開発と蓄積」・・・定番以外に学校で取り組める実践を増やしていく。

「計画修正のサイクルを作る」・・・教師がカリキュラム作りになれる。

「記録を残す」・・・記録を残すことにより実践の質を高めていく。

(高松市：小)

本校の計画・実践をふり返って

テーマが盛りだくさんすぎるとご指導をいただいた。より重点化した計画と実践が必要である。教師がひっぱりすぎず、子どもたちの中から調べたいことや疑問がわいてくるような教材との出会わせ方を工夫したい。また、培いたい力をより具体化して、構想の中に明示していくことで、活動に柔軟性が出てくるだろう。ゴールの児童像を明確に共通理解しておくことで、担任や学年団の裁量で実態や環境にあった活動を考えていける。

子どもたちにとって生きた活動とするために、実践をどんどん蓄積し、まずは教師が見通しをもって、取り組めるようにしたい。

(高松市：小)

計画・実行をしていく上で、「計画は、どのようにしてできたのか。」「見直しは、どのように行われているのか。」について各学年ごとにグループになり、情報交換をした。私のグループの小学3年生担任の話し合いでは、自分を含め転任した学校で受け持ちやすい学年ということもあり、半分の先生が今年の異動で赴任していた。学校の実態も分からないこともあり、計画は去年の計画に従って行っていた。中心となる地域課題の内容は、社会科との関連もあり、地域探検や高齢者交流が多かった。夏休みの個人課題を追究するために家庭の協力を得たり、国語の単元「個人レポートの書き方」と結びつけて総合的な学習を進めたりした工夫があった。課題として、「児童の意識を中心とした単元の流れになっていないのではないか。」や「地域課題と学校課題の関連をどのようにしてい くべきか。」や「学習の足跡が分かるように教材を蓄積してほしい。」などの意見が出てきた。

まとめの話では、「個の力を伸ばすためには、一人の力を付けてからグループ活動を組めばよい。」「進行状況が見えるように、掲示や記録をする。」「実践のレポーターを増やすために、教材を蓄積していく。」「計画修正のサイクルを作る。」「実践の質を高めるために、評価等の記録を残していく。」ことが参考になった。

(高松市：小)

計画の作成と修正

学習計画については、紙面上の計画に終わらず、どんな力を育てたいのかを考えながら、作って実践しては修正していくということが大切である。教師は常に、「どんな力をつけたいのか。」ということについては、説明責任を持つ。テーマ設定については、欲張らず、計画の作成、実行、修正の過程で大わくを作り、児童が主体的に取り組める余地を入れていきたい。それぞれの学校で人権、国際理解、環境、キャリア教育、地域学習等定番があり、内容が固定化しているという問題点も出てくるが、それらをレポーターの一つと考え、関連性を持たせたり深めたりしていきたい。

(さぬき市：小)

計画作成や取組についての交流から

- ・地域(ふるさと)の人々、子どもの思いを大切にす総合的な学習の展開
- ・計画は、教師が子どもに提案し、実態に合わせて子どもと一緒に変更していく。
- ・学年ごとの単元構想図。
- ・前年度の計画をもとに修正を加えながら実施していく。
- ・小・中の連携を大切にし、特に中学校は小学校でどんな総合を行ってきたかを踏まえて、さらに、活動を深めていく必要がある。

(丸亀市：小)

実践交流から

この研修では、各校の取り組みについて、実践交流を行い、その際の計画はどのようにして作られてきたか、また、その計画の見直しはどのように行われてきたかなどについて話し合われた。その中で、次の2つの点が大切であるということをもっと深く認識することができた。1つ目は、計画を作成する際には、子供に自分がしたいことがしっかりと表現できる力を育成することをはっきりと念頭に置いておくということである。すなわち、個を育てる視点をきちんと明確にもって計画をするということである。2つ目は、内容をあれこれ広げるよりも子供自身が自ら行動して進めているという意識を重視し、達成感をもたせていくということにねらいを置き、教師が欲張らないことである。この2つのことは、計画をする際にはこれまで見過ごされていたことではないかと思う。この視点をこれから校内でのあらゆる機会において是非役立てていきたい。

本日は第1日目であったが、総合的な学習のコーディネータの果たす役割の重要性を痛感させられた。そして、子どもたちが総合的な活動を通して、学習意欲を高め、考える力を伸ばしてたくましく成長して欲しいとの願いを強く持った。

(坂出市：小)

計画を修正するという視点

指導計画の実行と修正について、年度初めに計画を立てるとそのとおりに実施することに重点をおき、修正するという視点が欠けていたように思う。学期末に実行中の修正として、学年団での協議、現職教育の中での評価を今後取り入れるようにしたい。グループ討議では、情報交換ができ、充実した研修内容であった。しかし、「自ら学び考える生徒の育成・・・」といった総合的な学習の時間のねらっているものが果たして生徒に育っているかということが、先生方から出された。

(善通寺市：中)

定番のレポーターを増やす

学校での取り組みについて、学年の内容や地域との関連から、各学年ですることがほぼ固定化しているが、総合的な学習で行うことのレポーターを増やし、取り組んだものを残していった、レポーターの蓄積をしていかなければならないと思った。

本校は、年度末に年間計画を見直し、計画用紙に赤で修正をしたものを、総合の主任が預かって次年度の担任に引き継いでいるので、それを続けていきたい。この時、定番になっている活動を行う時には、マンネリ化しないように工夫するよう心がけたり、子どもたちと話し合ったりして計画をしていきたい。また、児童の意見により、課題や方向が変わる場合には、最初のめあてと照らし合わせ、方向が変わらないようにしながら計画の修正を行っていききたい。

(三豊市：小)

計画の変更や修正

学年ごとのグループで、話し合う中で、いくつかの課題が浮かび上がってきた。一つ目は、計画の固定化がされていること。その学年や子どもたちの願いに合うようには考えているが、様々な事情ですぐには変えられない学校もあった。二つ目は、年度当初の計画の変更や修正は難しいということだ。しかし、地域の方の協力を仰ぎながら、できる限り工夫をして、子どもたちが意欲的に取り組めるような計画を作成していくことの大切さを痛感した。

(三豊市：小)

第2回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

平成19年 8月2日(金) 9:45~16:30
高松テルサ 大会議室

講座の内容

- 1 講話・演習 授業の実施とコーディネーターの役割 1
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏
- 2 講話・演習 計画作成とコーディネーターの役割
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏

授業の実施とコーディネーターの役割 1

授業実践上の情報交換を地区別グループ(校区内の小中学校)で行い、実践上問題になっていること、その原因と考えられることをピックアップして付箋紙に記入し、模造紙にまとめた。それをもとに、グループで話し合い、意見の取りまとめを行った。

ここでは研修方法や内容や具体的にでた意見等を紹介する。

ワークショップによる研修 1

- 1 グループ編成
1グループ6名程度で今回は同じ中学校区内の小中学校でグループを編成した。
- 2 各自が授業実践上問題になっている点を書き出す。(黄色の付箋紙)
- 3 各自が問題点を受けて、その原因となっていると考えられることをグループでの話し合いの中で書き出す。(青色の付箋紙)



問題点とその要因から解決策を考える



関連を考える

各グループのワークショップの結果

問題となっている点

< 教師の資質、姿勢、校内体制 >

- ・ねらいの捉え方が教師間でバラバラである。
- ・教師間で取組について温度差がある。
- ・教師間の話し合いやふり返りの時間が取れない。
- ・中学校では総合よりも基礎学力アップという現実があり、生徒とともにのめり込めない。
- ・総合的な学習の時間の重要性があまり認識されていない。
- ・学年団任せ、学級任せで全体での協力体制が整っていない。
- ・担任一人で個別に関われる人数には限界がある。
- ・教員数に合わせてコース数が決まるという現実がある。

< 子どもの学び >

- ・ただ付いていこうとするものが多く、受動的で主体的な学びになっていない。
- ・個々の課題意識があまりない。
- ・自分の課題が見つからない子への支援。
- ・体験したことが学校生活に生かせない。

< 時間的制約 >

- ・内容追究の時間が中途半端で深まりが十分でない。
- ・学校行事的に消化されており、単発的で総合的な学習の時間といえるかどうか疑問である。
- ・教材を深く研究する時間がない。特に地域教材などは時間がかかる。

< 年間計画、教材、テーマ >

- ・内容ありきで活動のみとなる傾向がある。
- ・資料の整理ができておらず、引き継ぎが十分できていない。
- ・テーマが固定されていて主体的になりにくい。
- ・計画作成に子どもたちの発想が反映できない。
- ・育てたい力などを見直す時間が取れない。
- ・特活との線引きが曖昧ではっきりしない。
- ・小中学校で学習内容が重なったり、系統立っていないなど、小中間での連携が取れていない。
- ・昨年度の引き継ぎができておらず、計画の修正や改善がほとんどできていない。
- ・生徒のニーズにソフト面でもハード面でも対応し切れないことがある。
- ・計画の変更が行事や時間割などの都合で変更しづらい。

< 評価 >

- ・毎時間の評価ができていない。
- ・学習途中の個人の見取りが十分でない。
- ・個々の内心に迫る評価が難しい。

< 地域との連携 >

- ・家庭との連携が弱い。
- ・地域のことが十分分かっていない。
- ・ゲストティーチャーとして招聘するが子どもの関心や進み方にそぐわない場合が出てくる。
- ・外部交渉に時間がかかる。

原因と考えられること

- ・教師間の意識のずれや温度差があり、担当任せであったり面倒に思っている人がいる。
- ・現職教育で取り扱わないので共通認識をもったり教材研究を深めたりしにくい。
- ・子どもの体験不足。
- ・子どもが課題を持って探究する力は弱く、個人差がある。
- ・育てる力が明確でなく、評価方法がはっきりしていない。
- ・地域人材の活用のシステムが確立していない。
- ・行事、生徒指導、部活動等で多忙。教材研究や共通理解のための時間が取れない。
- ・「子どもが主体の学び」の具体像が十分周知されておらず徹底していない。

実践上の問題点

体験だけになってしまっていて、子どもに力がついていないのではないか。

図書室の本やインターネットなどで調べたり、それをまとめたりするばかりで、実際に見たり聞いたり触ったりする体験が少ないのではないかという批判が以前はあったが、最近はそのでもないようである。各校の実践の情報交換をした際にも、どの学校も体験はできているなあと感じた。また、ベネッセの意識調査でも「自然体験や社会体験などさまざまな体験活動ができる」と答えた担任は小学校で84.0%、中学校では77.2%と多くなっている。体験は十分にできるようになったが、子どもに力がついていないのではないだろうか。その力とは特に「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」である。

総合的な学習の時間は小学校では受容されているが、中学校では決してそうとは言えない。

中学校の先生方の意識の中には、まずは自分の教科、そして部活というのがあって総合的な学習の時間をあまり重要だと考えていないところがあるようである。話し合いの中で、教科発展型の総合的な学習を行ったらどうかということも言ったが、それは選択教科でできているようである。ベネッセの意識調査では「教科の時間が減っており、基礎的・基本的な内容の学習がおろそかになる」と答えた中学校担任は80.9%と大変多いことも事実である。

教師の考え方や意欲に差がある。

(土庄町：小)

小中の交流を通して

小学校と中学校と情報交換や課題の洗い出しの時間だったが、今まで直接話を聞く機会がなかった小学校の先生方から総合的な学習の時間の実態が聞けたことはよかった。効果的な学習を考えるためには、まず生徒の実態を知ることが大切になるし、これまでの学習との関連性を生かしたほうが成果に結びつきやすくなるように思われるからである。ただ、話の内容をより深めていくためには、同一の小中学校校区での話ができるとより具体性ができると思うので、常日頃から計画的な取り組みや継続的な小中連携が必要だと思った。

(高松市：中)

問題点とその原因

小学校中学年では、地域を教材とすることが多いが、学校近くにありながら、諸般の事情により、子の思いや願いに即した体験活動が十分に組めない。そのため、体験活動から課題設定をするのが難しい。

子の思いや実態からグループ構成を行う際、指導者数が足りない。

年度末に修正案は作成されているが、学校全体の取り組みが把握できていないため新年度になって、年間計画を立てる(修正する)際、よく分からないことがある。

中学校では、総合に対する教師間の温度差、意識の低さがある。学年差が大きかったり、年間計画がはっきりしていない。

中学校では、総合的な学習にあてる時間を確保するのが難しい。

(丸亀市：小)

情報交換と課題の洗い出し

情報交換

- ・身近なところからテーマを選ぶ。周りの自然環境、特産物等の地域の特色を生かして。
- ・人権学習を土台として全員でひとつのテーマに取り組む。人との関わりに視点を当て、地域の施設の利用やお年寄りの食事会に参加したりしている。
- ・周りの自然に触れる、人権学習など島の特色を生かして島だからできる総合学習がある。
- ・人権学習を中心にあらゆる機会に学習している。それが地域や保護者の願いでもある。

課題と改善点

- (1)年間計画の作成方法・・・体験は楽しいが伝える力やまとめる力が不足している。振り返りを年間計画に入れるべきだ。
- (2)小・中や学年のつながり・・・小・中で同じ内容のことがあるため情報の共有化が必要。同じテーマであってもねらいを変えて学習できる。年間計画等の情報交換の場を設けることも大切。
- (3)教師の意識や姿勢の問題・・・見直しのための時間の必要性。教師の指導型になってはいけない。実践の成果より課程を重視する。
- (4)環境の問題・・・出前授業等外部講師の活用。ゲストティーチャーの場合は事前に入念な打合せが必要。ねらいと話がずれることがある。
- (5)課題意識のもたせ方・・・やる気のない生徒のやる気を引き出すためには、スモールステップで課題を与える。

(坂出市：中)

情報交換で明らかになったこと

どの学校でも、抱えている問題は同じであることが分かり、ほっとするとともに、コーディネーターとして、今後学校の中でどうしていけばよいかを考えていく場となった。

<総合学習を進めていく上での問題点>

時間と内容の整理ができていない。

- ・ 様々な内容が総合の中に組み入れられている。・・・研究指定、情報、英語等子どもの育ちと経験の実態把握が弱い。
- ・ 子どもの興味・関心、これまで個々に身につけてきている力の分析ができていないまま、学習が進められていないか。

それぞれの学年の学習の様子が全職員に見えにくい

- ・ 情報交換の場が少ない。前学年との学習内容の引き継ぎが不十分である。地域の総合学習に対する理解が不十分である。

- ・ 地域へ総合学習についての発信が不十分なのではないか。

縦のつながりで学習を進めていく校内組織ができていない。

- ・ 一人一人の教師のがんばりには限りがある。深まった学習を行うには協力体制づくりが必要ではないか。

育てる力が明確になっていないので、評価の観点も不明確になっている。

教師の情報を収集・学習化していく力量が、学習を深めるか否かに関わっている。

(三豊市：小)

授業の実施とコーディネーターの役割 2

前半の「授業の実施とコーディネーターの役割 1」で明らかにした問題点や原因と考えられることをもとに改善していくべきことは何かを話し合い、全体で交流した。また、最後に松本教授より研修のまとめと「カルテの作成と利用について」の講話をいただいた。

ここでは、研修の内容と研修を受けての感想等を紹介する。

ワークショップによる研修 2

- 1 模造紙に貼った問題点と原因をもとに改善策を話し合い、書き出す。(ピンクの付箋紙)
- 2 各グループをまわって交流する。
- 3 自分のグループへ戻り、このワークショップで見えてきたこと、後期に向けての展望についてグループ内で意見交換する。

各グループのワークショップの結果

改善策

- ・総合担当の専門スタッフを決め、実施する。(コーディネーター)
- ・職員会、校内研修、スタッフ会議等の時間をとり、共通理解の場を設ける。
- ・課題を見つける力の育成や一人学び、一人調べの力の育成を図る。
- ・前年度の計画だけでなく、反省点や改善点を含めて次年度に引き継ぎ、計画や実践の改善を図る。
- ・校区内の小中学校で連絡会等を持ち、計画や資料等の交換等を進める。
- ・校内での情報交換、領域ごとのデータベースの作成など情報を共有する方法を工夫する。

ワークショップを通して

ワークショップを通して見えてきたこと

総合的な学習の時間がなかなか実施しづらい原因として、グループでは、「みんなが多忙であること」、「共通理解の場が少ないこと」、「時間割が自由にならないので時間確保が難しいこと」、「教師の意識や生徒の実態に差がありすぎる事」などがあがった。これらの解決策としては、「総合的な学習について各学校に専門的に取り組める教師がいること」、「小学校では2学年の協力ができること」、「まとめの資料を交換することで、前年度からの引継ぎをスムーズに行うこと」、「小中学校の連携の必要性」、「人材バンクを作り、情報交換をスムーズに行うこと」などが考えられる。さらに、今後の問題点としては、「教室の場所や時間の確保」、「各教科との関連性」、「一人一人の教師の意識向上」、「小中学生の発達段階を考えること」、「家庭や地域への発信を考えること」など、みんなの力で幅広い内容を考えることができた。

また、ワークショップを通して見えてきたこととして、「小中学校の交流会の必要性」、「管理職のリーダーシップ」、「情報交換の場の必要性」、「教科の力を伸ばすこと」、「内容を思い切って減らす勇気」、「総合的な学習の時間を地域に発信すること」、「スモールステップで課題を考えること」、「評価表(カード)の作成」、「校務分掌上の位置づけ」、「実施時期を6月頃から行うなど、現実に合うような実施方法」などがあげられる。

(高松市：中)

ワークショップを通して見えてきたこと

改善点，見えてきたこと

- ・ 教員全員で，総合学習のねらいから学びなおし，3学年分の計画を練り直す。
- ・ 行事中心の現在の取組が総合学習に近づくよう，現在の計画を元にして，徐々に改良していく。
- ・ 教科間の連携をはかる
- ・ 小学校でどのような学習をし，どのような力をつけて入学してきたかなど，生徒の実態を知る。

具体的な取組

- ・ 小中連携が必要である。生徒は小学校の学習を通して，総合学習に意欲的であるし，期待もしている。そこまで，小学校で育てている芽を中学校で摘んでいる現実を放置することは大変恥ずべきことである。また，計画を作成する上で，生徒の実態を把握することは基本である。総合学習は，殊に発達段階に応じ中学3ヵ年の計画を作成することが大切である。そのスタートである1年生の実態を把握していないのは，手抜きに近く，早急に小学校での取組等を中学が把握する必要がある。
- ・ 現職教育や学年団部会で，計画作成を行う。現在本校では，ほとんど総合学習の全体的な取組が行われていない。そうであるので必然的に，学年団部会では，局所的な計画になっている。それらの会を実現するための時間を確保する。特に年度始めは，時間確保が難しいため，前年度3月までに，それらの時間をとるよう学校あげて協力体制を整える。
- ・ 教員間の意思疎通をはかる。中学校では，専門教科の視点で生徒を見ている。したがって生徒がどのような力をつけているかは，一面的判断であることが多い。総合学習を考える上では，他の教科の視点も必要であることが分かった。その改善点として，総合学習の計画を作成する際には，ねらいとともに教科としての視点で話し合いをすることである。
- ・ 行事の取組の視点に，総合学習の視点を加える。本来の総合学習を実践するためには，一から計画を作成することが理想であるが，現実的には難しい。そこで，行事中心の総合学習ではあるが，総合学習のねらいを明確に意識し，そこへ到達するための視点に立った修正を加えていくのが現実的である。

(高松市：中)

改善点について

年度当初の校内研修等で共通理解を十分に図る。

実践記録を蓄積していき，全職員に発信する場を設ける。(まとめとして冊子にしたり，校内研修で報告会をしたり)

総合の年間計画をスリム化し，流動性を持たせる。

学校内だけでは，人手不足。ボランティアを募り，人材バンクを充実させる。

発達段階や系統性を考慮し，小中の連携を図る。

学習プロセスとして『体験 課題 調べ 体験 まとめ』を重視して展開していく。学び方の基礎を身に付けさせる。

教材開発・・・意欲の持てる教材，地域教材の発掘

(丸亀市：小)

ワークショップで出てきた課題及び解決策

(課題意識のもたせ方) 課題を見つける時間をしっかり取り、スモールステップで課題をもたせる。

(教師の意識) 共通意識をもつために、現教や職員会などで研修を深めたり、見直すための時間を確保したりする。

(年間計画の固定化) 振り返りの場をきちんと位置付ける、見直しをもった計画を立てる。

(学年及び小・中学校との連携) 内容の情報を共有化、データベース化して保存する。

(体験の生かせ方) 生活に生かせるために、ねらいを明確にした計画作りをする、体験の回数を多くする。

(学習環境) 資料コーナー、掲示コーナーなどを作成する、出前授業を活用する。

(地域とのしがらみ) 流動的に運用できる計画を立てる。

(坂出市：小)

課題の解決策

先にあげた課題の解決策として大変参考になったのは、上記にあげた課題の課題の持たせ方についてである。「この体験や活動が将来どう生かされるのかを明確にすると課題意識が生まれ、そういう意識から見直しを立てることができる」ということ、さらに「活動の見直しだけでなく、その活動後に自分にどれだけの力がついていくのかということの見直しをもたせる」ということが自分の実践を見直す視点を示唆してもらった。本校でも「つけたい力」と主な体験活動とをつないだ計画案を数年前に作成したがあまり活用されていないので、もう一度今年度の年間計画とともに見直し、その必要性を訴えていかなければならないと思った。また、グループ活動のさせ方についても、個人 グループ 個人と適宜流れの中に組み込んでいくことで学習が充実していくことが分かった。

(綾川町：小)

原因や解決策の話し合いから見えてきたこと

- ・ 個の力を伸ばしていく必要がある。個人 グループ 個人という形態を変えた活動を学習の流れの中で組み込んでいくことが大切であろう。それは、総合的な学習の時間だけに限らず、朝の会や他の教科でも意識して取り組んでいくべきことだと思う。
- ・ 課題を見付け、子ども自身が取り組んでいくのは難しいが、子どもに任せる部分を作り、子ども自身にやり遂げた満足感(達成感)を味わわせることで、子どもは意欲になるし、力も付いてくるのではないかと。また、例えば「そのテーマで広がりがあるか」「クラス全員ができるか」などの視点を与えて子どもに返して考えさせていくのも大切なことである。
- ・ 教師間の共通理解を図ることが大切になってくる。
- ・ 他の学年に学習の内容を知らせるには、意図的に発表の場を作ったり、掲示板を活用して活動内容を知らせたりして、情報交換していく方法もある。
- ・ 総合的な学習の学年の系統性や育てたい力を考えておくことが大切である。そして、評価の時期を決め、(小単元、学期ごと)育てたい力に合わせて細かい観点を決めていくことで、教師も評価していく内容が見えてくる。それを子どもにも知らせておくと、子ども自身に見直しをもたせることにもなる。
- ・ 年間の計画はあるが、学習をしていくながら子どもたちの意識の流れで変更になったところは修正していく。その記録を残していくことが大切である。

(まんのう町：小)

洗い出された課題と対策

活動は計画できるが、個の成長を総合的に把握できていない。

カルテを活用する。

児童の記録を残す（学年を越えたもの）。

複数の教師の視点で見、それを交流する場を持つ。

他教科との関連が明確でない。

学校として関連を示した資料を作る。

県教委やセンターで研究して情報を提供する。

小中学校の連携がない。

連携の場をとる。授業交換。個人の情報の交換。

評価・記録の工夫

写真やビデオなどすぐできるものも利用する。

子どもの自己評価や相互評価も活用する。

外部人材の活用

学校や市教委による組織作りをする。高齢者や団体組織を活用する。

P T A に依頼することも必要である。

予算の確保

市の事業を利用できるものは交渉し活用する。

（観音寺市：小学校）

コーディネーターとしてどう動くか

校内研修で、本研修について周知する。

単元における育てる力を明確にする。

- ・ 1 学期単元の育てる力を、実践より分析し直し、年間計画に書き込む。
- ・ 2 学期・3 学期の計画の実践内容、育てる力、時数を具体的に定める。

情報交換の場を工夫する。

- ・ 2・3 学期の校内研修に、総合の学習の実践の様子を情報交換する場（学期 1 回）を位置づける。
- ・ 実践中の総合的な学習の様子が他の学年の教師や児童にも見えるような工夫する。
- ・ 次年度の担任に実践の具体がわかるように、個のファイルとともに、教師用のファイルを用意し、記録を蓄積していく。
- ・ 課題を見つけられない児童、活動が進まない児童への対応の仕方を話し合う。
- ・ 学年便り等で、総合学習の様子を詳しく家庭に知らせていく。

協力体制づくり

- ・ 各学年の協力教師を決める。
- ・ 2 学年を見通した実践が図れるように、低・中・高で計画し、実践を検討・修正する。

計画の見直し

- ・ 学期末に計画を見直す場を設定する。

人材バンクの見直し

- ・ 学習で協力をお願いした地域の人や施設を計画の中に位置づけておき、見直しの材料としていく。
- ・ 領域ごとのデータバンクに整理していく。

（三豊市：小）

第3回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

教育講演会から学ぶ

平成19年 10月11日(木) 13:00~16:30
香川県教育センター 大研修室

第4回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座は、香川県教育センターが実施する教育講演を研修内容とし、鳴門教育大学 村川雅弘教授の講演を聴いての研修報告をもとに、総合的な学習の時間の充実を図るための方策について考えることとした。

演題

「総合的な学習の充実化のためのカリキュラムマネジメント」 ～体験と言葉・教科関連・評価を中心に～

講師 鳴門教育大学 教授 村川 雅弘 氏

講演の主な内容

- | | |
|--|--|
| 1 人間力を育む総合的な学習
今時改訂の学力観を繙く
PISA2003の結果を読み解く
PISAの基礎となるキーコンピテンシー
「主体的・協同的問題解決スキル」育成
を意図した計画立案
各教科等と総合的な学習の学びの連関 | 教科と総合の連関による「確かな学力」の育成と指導・支援
なぜ、総合的な学習にポートフォリオ評価か
多様な学びをつなげる新しい評価 |
| | 2 総合的な学習の時間の充実のためのワークショップ型研修プラン |

教師は一流のシェフにならなければならない

教師は一流シェフでなくてはならない。(好み、旬、体調、安い、栄養、バランスを考慮して)単元はコースメニュー(おもしろそう、やってみたい 調べる まとめる 発表 振り返る)で組み立てていく。地産地消の精神で(地元を知り、かかわる力。地域のネタ)創作料理を存分に楽しむ。

(小豆島町：小)

ワークショップ型研修

学校の総合的な学習のカリキュラム開発と連動させる。研修に参加する教職員の意欲・関心は高まる。研修の成果が学習指導等にすぐに生かせるために達成感も高まる。育てたい子ども像を具現化・共有化することが重要。子どもの実態は毎年異なる。子どもたちの実態や思い、教師・保護者・地域の人などの願いを再確認し目標を設定する。ワークショップ型研修の成果を学習にも取り入れる。総合的な学習だけでなく、部活動や委員会活動等において「概念化シート」などの活用ができる。「短冊」を用いてグループの意見を集約させ、黒板で意見整理を行うこともできる。

(観音寺市：小)

教育講演から学んだこと その1

1 改訂学習指導要領のキーワード ～体験とことば～

「体験とことば」に関連する実践を二つ紹介していただいた。

大島案内引き受け会社（香川県）

ハンセン病について学んだだけでは、差別はなくなる。発信しなければならないと考え、見学に来た人々に大島のことを説明しようと考えた。今、大島にはもう小学校はないが、7年前にこの取り組みが始まり、後輩に引き継がれ、5年間続いた。見学者は、児童らに次々と質問し、質問の数は30にも40にもなるが、低学年の児童も含め児童らはそのほとんどに答えることができる。

兵庫県篠山市立今田小学校5年生の取り組み

自然を守るために体長1.4cmのハッチョウトンボの生態調査や減ってきているサギソウを復活させるための取り組みなどを行い、自分たちがしてきたことや考えたことを劇にして表現した。その語り方は大変すばらしく、自分たちの思いを切々と訴えるものである。この二つの実践に共通するのは、児童が自ら学び、自ら考え、価値ある体験をしたことであり、それ故にすばらしい表現ができるのだと思う。

2 評価

やはり、総合的な学習の時間においては自己評価が中心になる。それは総合的な学習の時間の一番のねらいが「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」だからである。

評価規準を教室に掲示しておくという事例を紹介していただいた。

ア 計画的に学習を進めることができる。

イ 解決に必要な資料を自分で探すことができる。

ウ コンピュータを使うことができる。

.....

児童自身が、総合的な学習の時間に何ができるようになるかよいのか分かること、また、実践して何ができるようになったか自覚できることが大切であり、評価規準を掲示して見えるようにしておくことはいい方法である。導入の段階で児童とともに「どんな力がつくといいか」考えるのもいい。

3 ワークショップ型研修

小・中、もしくは小・中・高が連携する方法として「地域を活性化するために、総合的な学習の時間に於いて自分たちには何ができるか」というテーマで、小・中もしくは小・中・高の教員が集まってワークショップ型研修を行ってはどうかという意見をいただいた。幸い土庄町では幼・小・中連携のための研修会があり、総合的な学習の時間についても話し合っている。その場でワークショップ型研修を行ってみたい。

指導要領が改訂され総合的な学習の時間は70時間に減る。「教師は一流のシェフである。単元はコースメニューである。」と言われたが、私はコーディネーターとして先生方が一流のシェフになれるようバックアップしていきたい。

（土庄町：小）

教育講演から学んだこと その2

総合的な学習の時間の見直しが提唱されている昨今、本日の講演内容から総合的な学習の目指す人間力「自立した一人の人間として生きていくための総合的な力」と教師力について再認識することができた。特に、VTR で視聴した庵治第二小学校の大島案内ひきうけ会社の活動と兵庫県篠山市立今田小学校の6年生の総合的な学習で学んだことを発表する姿には心を動かされた。子どもたちが自ら進んで調べ、学んだことを堂々と表現することができるようになるまでには、きっと指導した教師の情熱や苦労が大きいだろうと考えられるが、具体的にどうしたらいいのだろうか。今回の研修では、子どもたちに求められている力をはっきり教えていただくとともに教師の研修のあり方についてたくさん学ぶことができた。

21世紀の社会を担う子どもたちに強く求められているのは、子ども一人一人が自らのあるいは社会の問題に関心を示し、その解決を図っていく力と子どもたちがお互いのあるいは社会の問題を直視し、その解決に向けて協力し助け合っていく力である。そのために、「主体的・協同的問題解決スキル」を組み入れた単元やカリキュラムの開発が重要である。さらに、総合的な学習の時間と教科・道徳・特別活動の関連が図られていなければならない。

子どもたちの「人間力」を豊かに育てるために、これまで以上に『教師力』教師の情熱、力量と資質、総合的な人間力と『学校力』学校全体としての取り組みが大きく関わってくる。

そこで「学校力」を強めながら同時に「教師力」を高めていく校内研修の方法としてワークショップ型の校内研修が有効であるとの興味深い話が具体例を交えて紹介された。

教育目標の具現化・共有化のための研修 カリキュラムの中での総合的な学習の時間と教科等との関連を明らかにするワークショップ 地域素材の発掘と教材化ワークショップ
安全管理・危機管理ワークショップ ワorkshop型の授業研究 カリキュラム評価のワークショップのように、いろいろな場で実践され、成果が出ているのがよくわかった。

ワークショップの手法には、自分の考えを付箋に書いて、大きな紙面に貼り出して整理・構造化していく KJ法、拡散的思考を促すためのウェビング法などがあり、各自の考えを出しやすく、教師同士お互いの考えを交流できることで共通理解を図るとともに新しいアイデアを出したり、これまでのやり方を見直したりすることができるようだ。ともに学び合い、力量を高め合うことができるし、それを学校全体の取り組みにつなげていくことができる。実際に私自身がこのワークショップ型の研修体験をもっともっと積んでいきたいと思った。

中学校の部活動で、5人のメンバーが、毎回自分たちの活動をふり返って付箋に書き込んで話し合うことがすばらしい結果につながった話は印象に残っている。

教師もお互いの力量を高め合い、学校としての取り組みを強くしていくことが、子どもたちの人間力を伸ばしていけると確信できた。教師もそれぞれの持っている力を発揮することができ、それをつないでいくことができるワークショップ型研修を組んでいきたい。今年のカリキュラム評価に取り入れて、来年の総合学習の計画に生かしていきたいと思っている。

今回の研修から、12月の学習発表会に向けてクラスのめあてを「39人一人一人が大勢の人の前でマイクなしで、堂々と大きな声で発表する。」と決めて取り組んだ。できるだけ、充実した体験を組み、一人一人の考えを出し合うワークショップ的学習の場を設定することで、歌も劇のせりふも、発表のアイデアも子どもたちが作り上げたものになった。発表会の練習の場でも話し合い評価する場を入れることは効果的であった。当日の発表会では全員めあてを達成することができた。やればできることを児童と共に体験でき、ともに喜び合えた。

最後に、「教師は一流のシェフである。子どもと教師を育てることができる。」という言葉から、うれしく感動できるような料理が少しでも作れるよう努力せねばと改めて思った。

(高松市：小)

教育講演から学んだこと その3

- ・ この講演で最も印象に残ったことは、
「教師は一流のシェフである。・・好み、体調、旬のものを料理できる人である。」
「単元は、コースメニューである。・・・子どもの実態をみながら力をつけるための具体的なものが必要であり、総合的な学習の時間こそ地産地消の精神で創作料理を十分に楽しもう。」という内容である。総合的な学習の時間における指導そのものであると感じた。
- ・ これまでの「自ら考える力」「生きる力」などの学力は、主に個人の成長や利益に目をむけられていたのではないかと・・・「何のために学ぶのか」という問いの答えに「社会への貢献」が含まれるべきである。という考え方に感銘した。
- ・ NHK総合テレビのハイビジョン「忘れないで」という番組を通して、自分のことばでしゃべれることの大切さ、ことばや内容を理解した上で説明できる力の大切さを改めて感じた。
- ・ ワークショップ型の研修の話は、すぐに実践できそうなものもあり、興味深かった。当日いただいた資料も大変参考になったが、時間があれば、村上雅弘先生の実践等をもっと詳しく知りたいと思った。また機会があれば参加してみたい。

ワークショップ型の校内研修（教師力を高めていく校内研修の方法）

子どもの実態や興味・関心、社会の要請、保護者や地域の願い、教師の願いなどから、特に総合的な学習の時間を通して育てたい力を付箋に書き、整理構造化を図る。

「学校教育全体で育てていきたい力」を明確化・共有化していくことが重要
教科のどんな力が、総合的な学習の時間の諸活動のどの部分で生かされているのか具体的に考えていくために、「総合的な学習の時間と教科の関連ワークショップ研修」が有効

- ・ 教師が互いの経験や知恵、情報を持ち寄って総合的な学習の時間と教科等を提供
- ・ 違った視点、多様な視点、新たな視点が見いだされる。
- ・ 異校種を越えた教師や専門家がアイデアを出し合うことができる。

「地域素材の発掘と教材化ワークショップ」

地域の素材を教材化するために、その地域に詳しい教師や地域の人から情報を提供してもらうことが多いが、ワークショップ的に行い、各自の経験や知識、アイデアを出し合うことも可能。

「総合的な学習の時間における安全管理・危機管理ワークショップ」

リアリティーの高い事例をもとに事前対応、発生時対応、事後対応の3つのグループに分かれて、対応マニュアルを作成する。ロールプレイを行った後に再度加筆修正。

ワークショップの手法を総合的な学習の時間だけでなく、部活動や委員会活動等において子どもたちに活用させていくことも有効であることを学んだ。

(さぬき市：中)

教育講演から学んだこと その4

来年、出される指導要領改訂において、総合的な学習の時間が削減される。中学校・高校の教師の中に総合的な学習の時間をきちんと行っておらず、効果を上げていないとの指摘は耳の痛いものであった。総合的な学習の時間が導入されたとき、学校行事・部活動の指導・生徒指導など多忙感があり、教科担任制の中学校現場において、教科の枠を超えた学習を行う総合的な学習の時間はなかなか受け入れられなかった。総合的な学習の時間はそのうちになくなる、教科の学習にもっと時間をとらないと学力が低下するという声が多く、どのような内容をどのように行うか十分議論がなされないまま、総合的な学習の時間が導入されていた。今回のような「総合的な学習の時間」をどのように進めていくか、つくり上げていくかについての講習会や香中研において研究をしていく機会があれば良かったのではないかと思う。いずれにしても、今回の改訂において、総合的な学習の時間は縮小されたが、きちんと総合の時間について考え、向き合うことが大切なんだと感じた。そのために、今以上に各教科との関連や身につけさせたい資質や能力を明確にしていくことが大切ではないかと思う。

前任校で総合的な学習の時間において、課題のを見つけ方、計画の立て方、情報収集の方法、まとめ方、発表の仕方などについて学習し、職業について調べたり、沖縄について調べたりした。一部の生徒にとって、この活動を通して自分の生き方についてじっくりと考えたり、沖縄戦について調べたことをもとに、平和について考える会を計画し、後輩に伝えようとする試みをおこなうなどどんどんと学びが広がっていく機会となった。その反面、課題を見つけられず、ただ調べるだけ、かなり教師の支援を必要とする生徒もいた。総合的な学習の時間は、このように多様な生徒に対して対応しなければならないので、教師自信の力が必要であると感じた。

総合的な学習の時間は「子どもの学びを変える」というが、教師自身の学びも変えていく必要があると思う。そういった意味においても、職員研修においてワークショップ型研修について勉強をしていく必要があると思う。今回、講演においていろいろな例を挙げていただいたが、ただ感心するばかりで、最初どのように手をつけていったのかのところをもう少し教えていただきたいと思った。また、総合的な学習をしっかりと行っている先生の具体的な実践や生徒の変容などを見せていただくとありがたいと思った。

村川先生の講演の中で「体験のしっぱなしでは、学びにならない」という言葉が心に残った。今、東中で行っている総合も体験だけで感想を書いて終わりにしている部分が多い。体験をたくさん行っているのに、生徒の身につけていないというのはここに原因があるように感じる。もう少し、一つ一つの行事（体験）にじっくりと取り組ませ、振り返りを行い、修正を加えていくといった学びのプロセスを身につけさせてやりたいと思うのだが、行事に追い立てられ、生徒も教師も多忙感だけが残っている今の現状で、どこから手をつけていけばよいのか途方にくれているというのが本音である。

総合的な学習の時間を通して「学びのプロセス」を学ばせることは、子どもたちの将来に役立つ「生きる力」を身につけさせることであると感じた。教師の指導の仕方次第で学力が向上していくということを今回の村川先生の講演を聞き実感した。難しいが少しでも、今回勉強したことを校内研修において役立てられればよいと思っている。

(丸亀市：中)

教育講演から学んだこと その5

・ 今回はじめて村川雅弘先生の講演を聴講でき、とても有意義であった。多くの実践の中で、ワークショップがいかに教師と生徒にとって重要であるかを短い時間ではあったが、密度の濃いお話の中で知ることができた。

1. 全体を通して感じたこと

「総合的な学習の時間」が導入された当初、キーワードとして「生きる力」や「確かな学力」の看板が掲げられた。これは、知・徳・体のバランスのとれた児童・生徒を育成を訴えていた。今次の改訂では「人間力」が新規参入した。人間力とは、「自立した一人の人間として生きていくための総合的な力」としている。現実の社会で大人がどのように生き、そこでは何が必要とされるのかを見せることによって、学ぶことの意義を子どもたちに伝え、何のために学ぶのかという目的意識を明確にする」と提案している。この提案を見て、学校教育で教師はどのような手段で日々子どもたちに伝えていくべきかを考えさせられた。毎年、年末になると今年1年を振り返って漢字一文字で表すとというのが恒例である。2006年度は「命」2007年度は「偽」であった。社会に欠落しているものや現実の出来事を顕著に表した漢字一文字であろう。来年こそ、偽装の「偽」でなく、正義の「義」であって欲しいと願うのは何も私ばかりではないと思う。このことから、総合的な学習の時間は「人間力」育成のために益々我々が重要な時間ととらえる必要が出てきている。

2. ポートフォリオ評価について

特に参考になったのが、ポートフォリオ評価である。診断的評価、教師が子どもの実態をしっかりととらえ、共通理解しておくことで総合的な学習で育みたい力を明確化・共有化することで活動に深みと活力が生まれること。形成的な自己評価・相互評価である。仲間同士の助言や励ましは子ども同士の関係性を高める上で有効であるし、「失敗から学ぶ」ことで、改善への意欲が生まれ、「成就感が生まれるであろうということ。ポートフォリオ評価は、スタートと比べて伸びていない子どもはいない。伸びを自覚し自信を育むことができること。振り返ることで、自分の成長を確認できるポートフォリオの良さを再認識した。

3. まとめ

村川先生の熱意あふれる数多い事例を聞き、総合的な学習の取り組みについて新しい視点を取り入れ、コーディネートする必要性を感じた。

(善通寺市：中)

1 教師は一流のシェフにならなくてはいけない。シェフはお客さんの体調を考えて料理をしてくれる。総合学習では、単元 コースメニュー、導入 前菜、活動 メインディッシュ、反省 デザートである。教師は目の前の子どもにどんな力をつけるか、そのためにどんな具体的な活動をさせるかを考えて単元構成をする必要がある。

2 総合学習に真面目に取り組めない教師がいるのは、教師に必要な手だてがすべてに入っているため、教師の格差、力のなさがはっきりするためである。

3 総合的な学習で育つ力

- ・ 総合学習でしているような学習を教科でもやると PISA 型の問題が解ける力が育つ。
- ・ 総合学習を大切にしていると、自分が将来どうしたいか、そのためにどうしたらよいかの目的意識が育つ。
- ・ 総合学習で大切なのは振り返り。自分の活動を振り返り、ついた力を実感させる。それが学びである。体験は、子どもが自然に学びの力を身に付けることにつながる。
- ・ 総合学習の達成感を味わうことで、教科の学習が大切なことが分かる。教科の力を身に付けようとする力が育つ。

4 総合学習で大切にしたいこと

- ・ 発表力を支えるのは教科の力。しっかりした情報を発信するためには、教科の学習が必要。人に伝えるためにも教科の学習が必要。教科との関連を意識しないと総合学習はうまくいかないことが実感できる。
- ・ 子どもたちと単元の初めに評価規準を決め、子どもにいつも分かるように貼っておく。
- ・ 発表後のアドバイスを付箋を貼り言葉で評価し合う。
- ・ ポートフォリオ（証拠集め）づくりをすることで、成長の跡、成長の原因となった事実が分かり、こういうことを続けていけばこんな力がつくということが実感できる。

5 研修の構え

- ・ 教師の力に差がある。しかし、子どものために自分の力を出し切ることが大切である。
- ・ 研修とは、一人一人の力を子どものために使って、出し合いつないでいくものである。・ ワークショップ型研修の勧め。（年間計画づくり、地域素材の発掘と教材化、授業改善等）

6 仕事で泣ける仕事見つけをしていきたいものである。

< 今後、生活・総合の学習の実践に生かしていきたいこと >

1 単元づくり

新しいことを作るのではなく、教科との関連を図れる単元づくりをすればよい。毎年子どもは変わるので、一度作った計画を踏襲するのではなく、子どもと一緒に、教科・子どもの生活との関連を図りながら単元を作っていけばよい。それが子どもが本当に目的意識を持って取り組める学習となる。

2 評価規準づくり

この活動で「どんなことができるようにしたいか」「そのためにどうすればよいか」（評価規準）を子どもと確かめたうえで活動に入る。そして、それを教室に貼っておき、絶えず、その観点で活動を振り返る。そのことが子どもの学びを高め、教師は育てる力が明確になって指導がしやすい。

3 活動の振り返り

評価規準にそって振り返るときに、子ども同士で、評価し合う場（反省カード、付箋等）を工夫する。

（三豊市：小）

教育講演から学んだこと その7

現行の指導要領では「生きる力」の育成に向けて実施されてきたわけであるが、今回の改訂では、「生きる力」をより具体化し発展させるという視点から「人間力」の考え方をを用いて見直しを行っている点が重要であると思った。最近、特別活動等の研修会で「人間力」という言葉を耳にするようになって久しいが、私自身もここ何年か気になっていたのも、興味深く聞くことができた。特に、現実の社会や多様な人とのかかわりと学ぶことの意義の理解や目的意識の向上を重視している点は、毎日子どもたちと接してきて必要と感じる部分とかなり一致していると感じた。

また、PISA 型の読解力についてであるが、本校においても今年になってから校内研修の内容として取り上げ、共通理解を図り、学校としてどう取り組んでいったらよいのかについて計画立案中であつたので、人間力の考え方と PISA の基盤となるキー・コンピテンシーの関連についての段は、大変参考になった。PISA や全国学力調査の表面的な数値結果に振り回され過ぎるきらいのある教育界であるが、その根底にある考え方をよく咀嚼し理解した上で、しっかり地についた実践ができるようにしていきたいと感じた。

次に、「主体的・協同的問題解決スキル」育成を意図した計画立案における八つのスキルは、問題解決過程に沿ってどれも大切であると思った。それらのスキルのそれぞれにおいて「子ども一人ひとりが主体的に取り組んでいくのに必要なスキル」と「友だちや、場合によっては異なる世代や立場の人と協力しながら取り組んでいくのに必要なスキル」の二面に言及していることが印象に残った。特に後者の『異なる世代や立場の人と協力しながら取り組んでいくのに必要なスキル』については、今まで自分の実践に抜けていた点であつたので考えさせられた。このことは、子どもたちが社会の問題を直視し、その解決に向けて協力し合っていく力に繋がるものであり、非常に重要であると思った。したがって、子どもがお互いに協力し、あるいは異なる世代・立場の人と協力して発揮せざるを得ない活動をどのように組み入れていくのか、各教科等と総合的な学習の学びを関連させながら、今後もっとよく考えていきたい。

さらに、総合的な学習における評価についてであるが、(評価については実践が不十分であつたので大変興味深く聞き入りました。)徳島県の実践で、教科や道徳、特別活動、総合などの学習場面だけでなく様々な生活場面(新聞、テレビ、雑誌など)の中で、その日の学びを名刺サイズのカードに簡単にまとめ、それらのカードを A3 サイズのシート上で、テーマに従って整理・構造化し、相互の関連を意味づけているという実践は、大変印象に残った。「学んだことがつながっていくと楽しい」とか「このようなことを一生続けていきたい」といった感想がもてることは、素晴らしいことだと思った。私も、今後、このような教科等や生活を含めた学びの「知のネットワーク」づくりを子どもたちと一緒にしていきたい。

次に、総合的な学習の時間の充実化のためのワークショップ型研修プランについてであるが、本校でも KJ 法的な手法によるワークショップ型研修を実践してきているが、いろいろな視点から考えが出されたり、それを整理分類することによって焦点化したりして、研修に深まりがみられるようになったので、紹介されていた様々なワークショップ型の研修プランは、どれも大変参考になった。今後、ぜひ取り入れてみたいと思う。

また、事例で挙げられていたバスケットボール部の生徒たちの取り組みは、非常に心に残った。小学生の児童にもワークショップ型の話し合いの場を導入しても効果があると感じた。

(三豊市：小)

第4回総合的な学習の時間コーディネーター養成講座から

平成19年 12月26日(水) 9:45~16:30
高松テルサ 大会議室

講座の内容

- 1 講話・演習 カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 1
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏
- 2 講話・演習 カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割
香川大学教育学部 教授 松本 康 氏

カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 1

第2回の研修講座(8/2)で指導いただいた個人カルテについて、抽出児の「とらえ」、抽出児の成長への「ねがい」、そのための具体的「てだて」と、2学期以降の抽出児の「記録と評価」を持ち寄り、児童生徒の評価の在り方について情報交換と評価方法の工夫改善についてワークショップ型研修を行った。

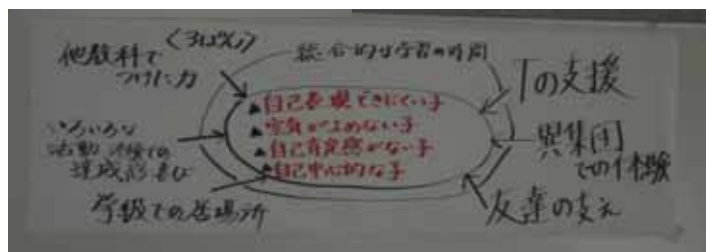
ここでは研修方法や内容や具体的にでた意見等を紹介する。

ワークショップによる研修 1

- 1 グループ編成
1グループ6名程度で今回も同じ中学校区内の小中学校でグループを編成した。
- 2 抽出児の指導及び記録と評価等について資料を基に発表し、その都度質疑応答する。
- 3 児童生徒の評価の在り方について「どんなことに気付いたか」「どんなことが問題になってきたか」について話し合いを行い、模造紙にまとめる。



評価の在り方についてまとめられた資料



ワークショップの様子

各グループのワークショップの結果

気付いたこと、問題となってきた点

- ・活動から逃げる子にどう働きかけるか。
- ・授業途中の評価をどうするか。
- ・自己表現しにくい子、自己肯定感の乏しい子、自己中心的な子にどう関わっていくか。
- ・目立たない子、問題行動を起こす子、支援を要する子にどう関わっていくか。
- ・保護者や地域をどう巻き込んでいくか。

改善点

自己肯定感を持たせる

- ・失敗体験も経験させ、生かしていく。
- ・多との比較ではなく、個人としての伸びを認めていく。
- ・こだわりやよさを生かし、認めていく。
- ・様々な活動や体験を通して達成感や学ぶ喜びを実感させる。
- ・自己決定の場面を設定しその意思を大切にす。
- ・活動において一人一人に役割を持たせ、活躍をしっかり褒める。

内容、個の育ちについて連携を図る

- ・個の育ちについて学年間の連携を蜜にする。
- ・生活科と小学校の総合、中学校の総合の連携を図る。

カリキュラムの工夫

- ・学年段階に応じたスモールステップの学び方を分析する。
- ・子どもの実態にそったカリキュラムを設定する。
- ・「ねがい」「てだて」「とらえ」のループを循環させ、個の育ちを引き出していく。

ワークショップを通して

カルテの作成と利用について

子どもの現状を把握し、ねがいをかけ、手だてを考え、実践していく。これをすべての子どもに行っていく。個に焦点をあて、個に応じて必要とされる手だてを講じていく。授業で、学級経営で、総合の時間で、部活動で、休み時間で、すべての教育活動の中で。このような気持ちをもって教職員全員が自分の授業、学級、部活動を通して、一人ひとりに声をかけ目をかけ、願いをかけていくことで、個の生徒や生徒集団はもちろん、生徒を取り巻く保護者、そしてわれわれ自身、何が大切で、何が子どもに必要ななど、教育観や評価観までもが変わっていくのではないだろうか。今回2名の生徒についてカルテを作成し、研修講座で、グループの先生方の実践発表や各班のまとめ、松本先生のお話の中であらためて感た。

(高松市：中)

総合的な学習の時間こそ・・・

グループで各校の事例としてとりあげられた抽出児は、特別支援教育にかかわる児童・生徒が多かった。外での活動が多くなる総合的な学習は、特別に手がかかる児童・生徒がいるとかえって進めにくい実態が話し合われ、複数での支援の必要性を感じた。しかし、児童・生徒の中にはいろいろな表現方法がとれるため総合的な学習の時間こそ自己表現ができやすい子どももいる。評価の仕方が教科の時間とは異なったやり方ができる意味では、大切な時間であるという意見になった。

(高松市：中)

授業中の評価をどうするか

近隣の学校での実践事例の情報交換、評価方法の工夫改善について話し合いが行われた。小の先生からは、評価について授業だけでは全ての児童の見取りができない。表現物に頼りがちになる。評価の観点をいつも頭においているが、あいまいになっていないか。各校の育てたい力をもとにした評価となっているのか、などの課題があげられた。また、小の先生の話では、カルテを書くことで単元の修正や反省ができてよかった。他教科の学力を総合的な学習にどのように生かすかが、課題となるが、地域を巻き込んだ単元構想を計画するなどによって、総合的な学習を通して自信をつけたり、自己肯定感ができたりしていたとのことだった。どの学校でも、支援を必要な児童は、能力的に低いことだけでなく、人との関わりがうまくできなかつたり、問題行動をしたり・・・大変さを感じた。また、小中の総合的な学習に対する温度差は、今回もいたし方のないことだが感じた。そこで、私たちの班では次のようにまとめた。

課題 授業中の評価が難しい。(観点の基準?保護者への伝え方?表現物に頼ってしまう評価?)

支援の必要な子どもは表現力に乏しい。(教師の見えないところを補う相互評価をする、他教科の関連を図り表現力を習得する)

成果 他教科で活躍しにくい子どもも興味を持って活動できる。

地域や保護者、外部の人たちの協力を得やすい。小中連携も図る。

(高松市：小)

気になる子や目立たない子に・・・

所属するグループ(中学校2校、小学校4校)から、それぞれの学校における抽出児の指導方法について実践交流を行った。その中で、A小学校のB児は、複雑な家庭環境から自分に自信を持たず、友だちとのコミュニケーションがうまくいかなかった。そこで教師が、自分から声かけできる子供になって欲しいと願って、総合的な学習を切り口に、ペア対話やグループ活動の機会を多く取り入れた。他教科でもコミュニケーション活動を多くとるようにし、その進歩の様子を家庭にも伝え、賞賛してもらえるようにし、存在感を感じさせるようにしてきたという取り組みがあった。総合的な学習において、気になる子や目立たない子に対しての「とらえ」「ねがい」「手だて」を明確にもって取り組んでいくことがより良い学級作りにもつながることが明らかになった。自分の実践と比べながらこうした実践交流を行うことで、指導方法が改善され、子供たちに生かされていくものになるのだという実感がもてた。

(坂出市：小)

失敗体験を生かす

総合的な学習の時間における児童評価のあり方についてワークショップをした。私たちのグループでまとまった考えは次の通りである。

どの子ども認められる総合的な学習の時間にする。

先生からだけでなく友達からも認められるチャンスが他教科よりも多い。だから、その子の得意なことやできることを生かしてがんばれる場を設定し、どの子ども活躍できるようにする。

失敗体験が生かせる総合的な学習の時間にする。

日常生活での失敗だとそれで終わりになることはままあるが、総合的な学習の時間なら教師が介入することでその失敗を意味づけることができる。例えば人間関係の距離の取り方を教えたり、どうしてうまくいかなかったのかを原因を探らせたりして、次はどうすればいいのか自分を見つめさせる場ができる。

(まんのう町：小)

みんなで育てていくという意識

グループで、抽出児の指導について討議した。各校抽出児として選んだ児童生徒は、「自己表現ができない子」「自己中心的な子」など集団に属するのが難しい子どもが多い。それらの子どもたちを「総合的な学習の中で、どう生かし、どう育てていくか。」というのが課題である。総合的な学習の時間であっても、担任が一人で行っている場合は、個別に付く時間が限られているため、その子どもたちの支援をするのには限界がある。とくに、障害児学級に所属する子どもが交流学級の中で学習するときには、別の教師の支援が必ず必要である。活動の場の多い総合的な学習の時間では、他の先生方の協力を得て、支援の必要な子どもをみんなで育てていくという意識が大切であると感じる。そのためには、学校全体でカリキュラムの作成や体制づくりを考えていかなければならないと思う。

また、自己表現ができない子に関しては、例えば活動が途中で止まっているときに、なぜ表現ができないかを掘り下げて考えていくことが大事であり、個別に声をかけていく必要がある。また、個に応じた評価をつくって、自分の成長を自分がわかるようになれば、達成感や次の意欲につながるのではないかと思う。

(三豊市：中)

個にどう寄りそうか

活動から逃げてしまう子どもに、どう働きかければよいかということが出た。解決策として、できたことは誉める、呼びかける、今からすることをはっきりさせる、話をじっくり聞く、その子が言葉に出しにくいことを言葉に表すということがあげられた。個々に合わせて、その子が活動に意欲的に取り組めるように支援していくことが大切だと思った。

また、保護者をどう巻き込んでいけばよいかということが出た。解決策として、写真や活動ファイルなどの表現物を作ったり、学年通信で知らせていったりするということがあげられた。総合的な学習について、定期的に知らせていく必要があると思った。

松本先生の指導より、個を構造的に評価し、その子の良さを多様な観点から見たり、観点相互の関連から学力との関連を図っていくことを学んだ。

(三豊市：小)

カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 2

前半の「カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割 1」話し合った内容について全体交流の場を持ち、改善に向けた考え方の共有を図った。また、後半は松本教授より「カリキュラムの評価・改善とコーディネーターの役割」の講話をいただき、総合的な学習の時間のカリキュラム評価と、中教審の「中間まとめ」をもとに総合的な学習の時間の改訂の方向についてご指導いただいた。

ここでは、研修の内容と研修を受けての感想等を紹介する。

ワークショップによる研修 2

ワークショップによる研修 1でまとめたものをもとに各班の話し合いの結果を発表する。



松本教授によるご指導

各グループごとの発表（左上、右上、右下）

グループ交流を通して

グループ発表から

午後の各班の発表は各グループの特色があらわれており、発表を聞くなかでも児童・生徒に対するとらえ方や今後の指導の工夫を考えることができた。各グループとも内容そのものには共通な話題が多かったが、1枚のとりこの用紙に書いたまとめ方は箇条書きから図式化したものまで様々で、まさしく人が変われば表現方法が異なることを実感させられた。まさしく、いろいろな機会にいろいろな人の発表を聞くことの大切さを直接学んだように思う。

（高松市：中）

カリキュラム評価のポイント

総合的な学習の展開の中では、「指導計画における評価の観点」が大きくとらえられるので、「個を評価する観点」が多くとらえられるようになる。子どもの良さは、多様な観点で見つけなければならない。そのために観点相互の関連や学力との関連が大切である。教師の普段の評価は、1～2個の観点で評価していることが多い。総合的な学習の取り組みにおいて、その観点の幅が大きくなり、教師の子どもを見る目も広がって成長してくる。そのためにカリキュラムの評価が活動の中で常に取り入れられる必要がある。そのポイントは以下の6点である。

- ・目標の明確化・具体化・・・個の目標に即して「育てたい力」を具体的に決める。
- ・内容・教材・スケジュールに柔軟性・・・計画は綿密に作り、何度も見直す。
- ・個々の子どもの変化・・・個々の子どもの願いが達成されているか。
- ・集団の変化・・・集団の関わり合い、コミュニケーションや活動性の広がり具合。
- ・多様な評価・・・子ども、地域、保護者、教師集団等の内部と外部の評価の実施
- ・問題点の発見・・・具体的な子どもの質をよくするための機会を多くとる。

(高松市：小)

個を生かす

今回の研修で、支援を必要とする児童や大勢に埋もれて目立たない児童を抽出した記録を基に情報交換をしたが、児童の実態は様々であった。授業をかき回す、学力が低い、周囲の意識からずれやすい、自信が持てず人に頼る、意欲を見せないなど挙げていくときりがないほどたくさんあった。その現状を打開するために大切なのは「すべての個に願いをかける」ことである。「とらえ(現状把握)、ねがい(個の目標)、てだて(具体的な指導方針)」という3つの視点から個をとらえ、それを指導に生かすことである。いろいろな児童がいて、それぞれの児童ができること、できないこと、得意なこと、苦手なことをもっている。それぞれを適当な場で生かすための生かし方を考える必要がある。個を生かすことができれば、「個々の子どもが変化」し、「集団も変化」する。

(善通寺市：小)

グループ交流を通して

他校の先生方の評価と比べることで私自身の評価の特徴が見えてきた。

子どもは総合的な学習の時間だけで変わったわけではないと考えていた。

簡単に子どもは変わるものではなく、学校生活のいろいろな場面でその子どもに周りが多様に関わり変化を促した結果のある一面が総合的な学習の時間に表れていると考えていた。そのため、総合的な学習の時間においてつかませたい力を十分に意識しないまま活動させてしまっていた。

子どもを評価するのは教師だけと考えていた。

評価者が多いほど子どもを多面的にとらえることができる。しかし、総合的な学習の時間で関わる地域の方などに児童の評価を要請することは考えていなかった。工夫次第では、後日聞き取りをすることも可能であることを知った。また、子どもの自己評価や相互評価も取り入れて子どもを多面的に見たい。

そして、ワークショップをすることにより、知識が増えるのではなく思考が促されることを実感した。

(まんのう町：小)

各教科等との連携、小中間の連携

他のグループの発表の後、香川大学松本先生のお話を聞いた。今後、総合的な学習の時間数は減少するが、それは弱体化ではなく、ねらいと内容を明確化して中身の濃いものにするという方向性であると聞いた。その中で注目したいのが、「総合的な学習の時間と各教科、選択教科、特別活動の役割を明確にし、連携を図る」ということである。中学校の場合特に、選択教科や特別活動との明確な区別がなく、同じような内容を重複して行っていることが多い。その点をきちんと立て分けて、年間のカリキュラムを作っていけば、時間数が減っても十分なことができると考えられる。また、学校段階間の連携についても、特に小中でその役割がきちんと区別されていれば、同じようなこと重複して行うことも改善されるし、逆に、パソコンの技能や言語活動など小中で継続的に養っていききたい能力も連携して育てていくことができると思う。

さらに、育てたい力や取り組む学習活動や内容を、子どもたちの実態に応じて明確に定め、どのような力が身に付いたかを適切に評価することや、「育てたい力」を個に即して具体化できるような評価ツールの工夫が必要であると感じた。

(三豊市：中)

計画は破られるためにある

総合学習的学習の指導計画では、目標を明確・具体的にすることが、育てたい力を個に即して具体化し、子どもが立てた目標と組み合わせ、生きる力がどう付いたかを評価していくうえで大切である。また、計画は、綿密に作り、ずれたところを年度途中に見直していく。この時、「計画は破られるためにある」ということばが印象的だった。子どもが破ってくれる計画はおもしろいと言われた。そう、思えるようになりたいと思う。

総合学習的学習の活動において、子どもの居場所を作ったり、集団の中で個を関係づけたりすることが大切である。また、周りとの関係が見えやすいので、個々の子どものいいところを見つけ、評価していきたいと思った。

校内では、年に数回(学期ごとに)計画の見直しをする機会を持ったり、問題点の発見や改善策を考えたりして、いろいろな実践を知る機会や話し合っていく場を増やしていかなければならないと思った。

(三豊市：小)

先生のまなざしが変わると・・・

最後に、松本教授の指導助言と講話をしていただいた。その中で、一番印象に残っているのが、「授業研究のツールには、いろいろあるが、その子を見て、座席表を書いてください。いつも何も言わない子が手を挙げて話してくれる。それは先生のまなざしが変わっていたからです。」という言葉だ。座席表は、たいてい白紙にしておいて、反応を書き込むために用意している。しかし、その子の学習状況や思考・行動を表す「とらえ」と、長期的な指導目標である「ねがい」と、具体的な処方である「てだて」を書くことで、一人ひとりを見つめる目が違ってくるのだという言葉に深く共感を覚えた。この4回の研修を通して学んだことを、明日からの授業に生かしていきたいと思う。

(三豊市：小)

コーディネーターとしての役割

総合的な学習の時間は学校、担任に任されている面が多い分、成果に差が出やすい。

どのように校内の体制を整え、研究を進めていけばよいか具体的な示され、大変参考になった。

研修で学んだ校内体制や授業研究の進め方の中には、本校で行っているもの(できていること)とまだ行っていないもの(できていないこと)があった。その中で、授業研究、カリキュラム評価については、本校に取り入れていきたいところが多くあった。「目立たない児童」や「支援を必要とする児童」を中心に「とらえ」「ねがい」「手だて」を書き、それを軸に授業研究を進めることは、授業の質を上げる研修としてぜひ取り入れたいと思った。「必ず達成する目標」と「達成したい目標」をさび分ける、問題点の発見と改善案の提案はセットでするようにするといったカリキュラム評価の仕方もぜひ本校に取り入れたい。

また、一つ一つの働きかけや研修を行う際にも、取り組みの質を上げるコーディネーターとしての工夫があることが分かった。その工夫について具体的にどのようなものがあるかを複数知ることによって、自校に一番効果がある方法を選んでいける。具体的な方策をさらに研究し、生かしていきたいと思う。

(小豆島町：小)

コーディネーターの役割と今後実践していきたいこと

- ・校内体制の基本方針作りのために、職員の意思統一のための情報提供準備をする。
- ・自校のねらいをはっきりさせて、話し合って目標を設定する。
- ・先行事例、先行実践の収集をして、校内の実践に生かせるものを提示できるようにする。
- ・他教科との指導の違いをはっきりさせて、一人一人の子どもの成果と変化を見つめるような授業研究をするように研究を進める。
- ・効果的な授業研究のツール(座席表など)を活用し、個々の子どもの変容についてしっかりと検討するような授業研究の実施をする、たくさんの教師の目で一人一人の子どもを見つめ、育てるような授業研究を積み上げていく。
- ・校内でのコーディネーターとしての自覚を持ち、リーダーとしての役割を具体的に毎月計画し、実行し各学年間の活動の潤滑油として相談にのり、一つずつでも自校の実践を積み上げていく努力をする。

(高松市：小)

中学校現場でコーディネーターが果たす役割

今回、総合的な学習の時間コーディネーター養成講座に参加させてもらって、いろいろなことを勉強させてもらった。総合的な学習が根付いてきている小学校の実践報告を聞き、大いに刺激を受けた。しかし、総合的な学習の時間が十分機能していない中学校現場において、どこから手をつけていけばよいか、どのように校内研修を進めていけばよいか不安である。各校1人、コーディネーターをつくり総合的な学習を根付かせようとする意図はよく分かり、今回学んだことを校内研修で少しでも伝えていきたいと考えているが、多忙感ばかりで職員室に余裕がない中学校の現状において、どこまで伝えていけるか不安である。1人でなく多くの人に、このような研修を聞く機会があればいいと思う。また、いろいろな場で、たとえば香中研の研究グループの中に位置づけ多くの方が「総合的な学習の時間」について考える機会があればいいと思う。

(丸亀市：中)

個人カルテ (抽出児の指導)

WS 「抽出児の指導」

作成者 ()

抽出児名	とらえ	
	ねがい	
	てだて	

抽出児名	とらえ	
	ねがい	
	てだて	

個人カルテ（抽出児の記録と評価）

WS 「抽出児の記録と評価」

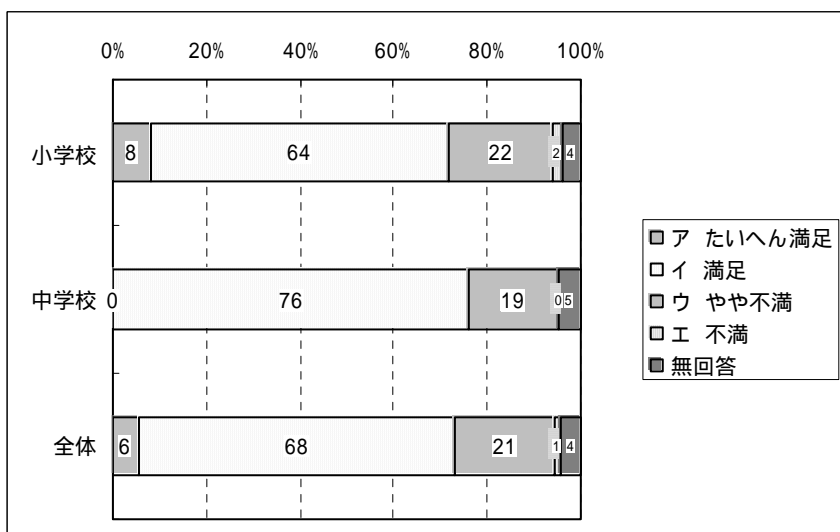
作成者（ ）

	指 導 計 画	抽 出 児 （ ）
4 月		
5 月		
6 月		
7 月		
8 月		
9 月		
10 月		
11 月		
12 月		
1 月		
2 月		
3 月		

平成18年度総合的な学習の時間コーディネート養成講座を受講して アンケート結果の概要

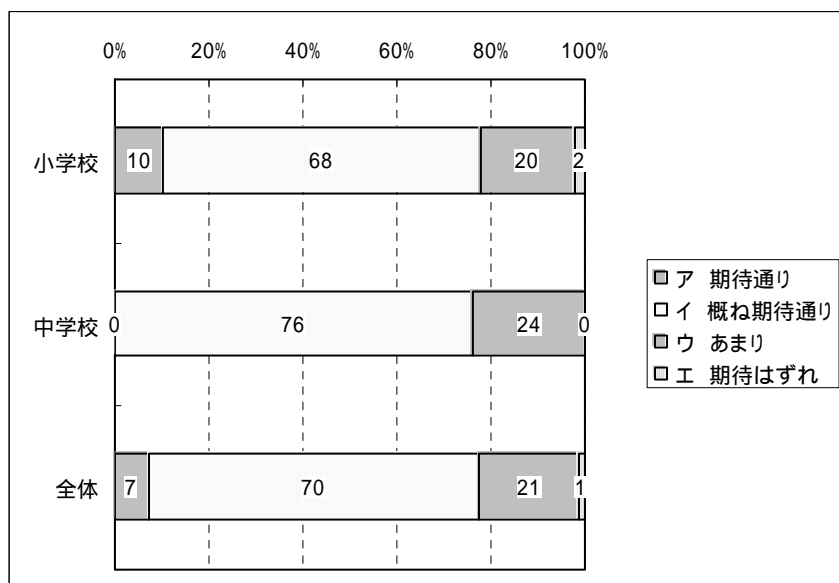
調査日 平成19年12月26日
 対象 受講者 小学校教員 50名
 中学校教員 21名 計71名

1 養成講座の満足度



- ・小学校の教員の72.0%、中学校の教員の76.2%が、この講座に満足を持っている。
- ・総合的な学習の時間の悩みや課題が近隣の学校の先生と話し合えてよかったという意見があった。
- ・ワークショップ型研修は持ち帰って学校で活用できたという意見も見られた。

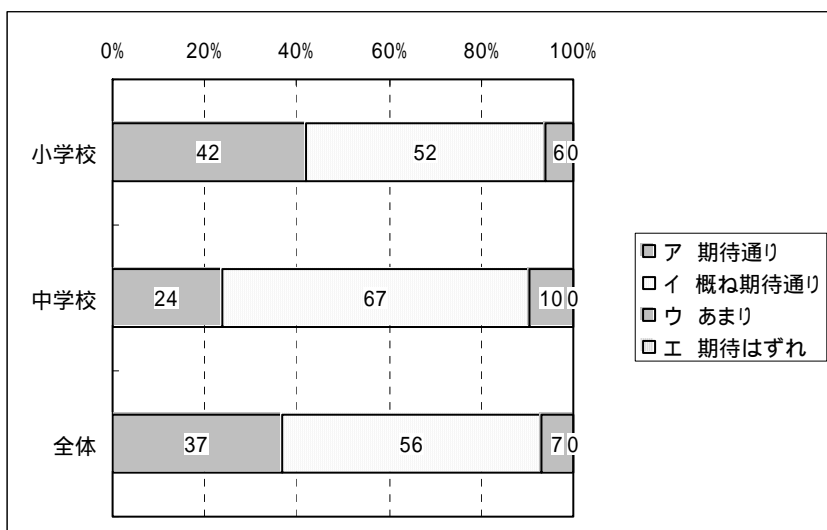
2 (1) 研修内容や方法 [講義]



(1) 講義

- ・小学校の教員の78.0%、中学校の76.2%が「期待通り、概ね期待通り」と答えている。
- ・ワークショップにより、他校と、また小・中との情報交換ができたのがよかったという意見が多かった。
- ・先進校の取組等の具体的な実践事例の紹介をもっと取り入れて欲しいという意見もあった。

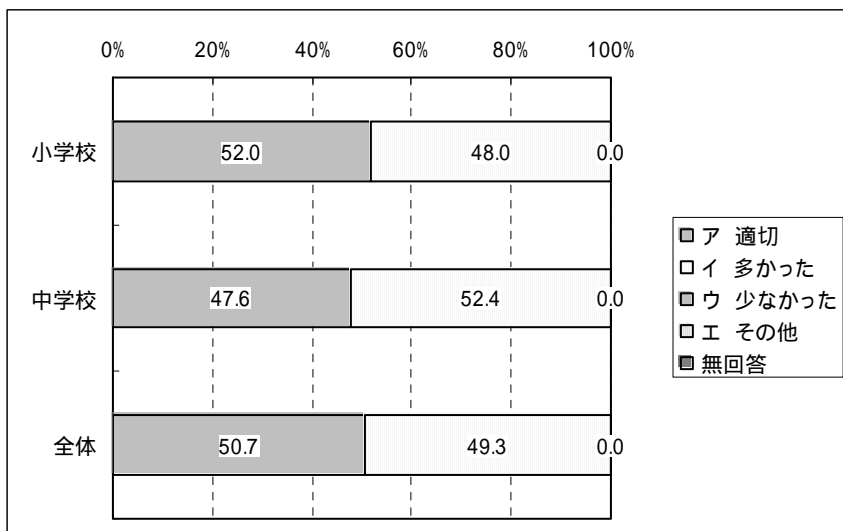
2 (2) 研修内容や方法 [教育講演]



(2) 教育講演

- ・小学校の教員の94.0%、中学校の90.5%が「期待通り、概ね期待通り」と答えており、教育講演には満足している。
- ・全国の多くの実践例が紹介され、自校に生かせる方法・内容を多く学ぶことができたという意見が多く見られた。
- ・パワーポイントやビデオ視聴による話が分かりやすかったという意見が多く見られた。

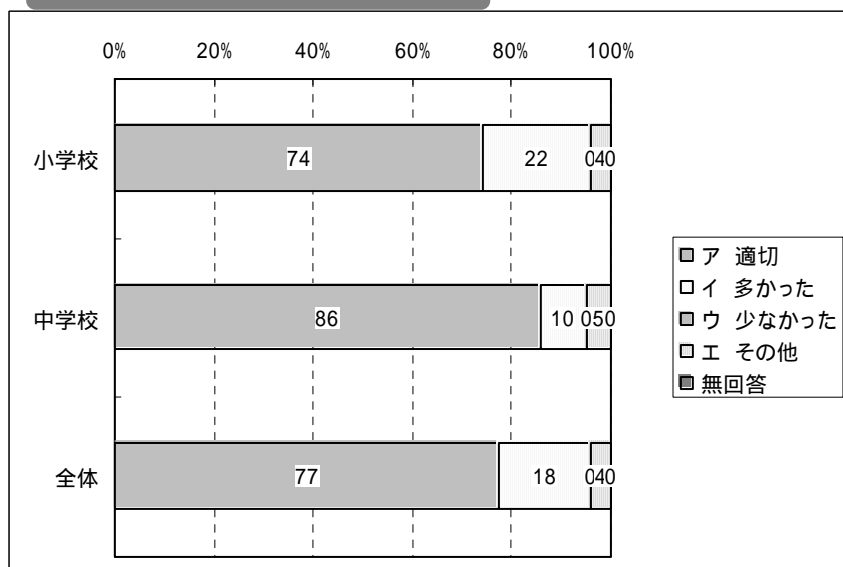
3 (1) 研修の運営 [研修日数]



(1) 研修日数

- ・小学校教員の52%、中学校教員の47.0%が研修日数を「適切」と答えている。
- ・他はすべて「多かった」という意見で、期間が昨年度に比べて長期にわたったことや1日研修にしたことなどが要因と考えられる。(昨年度「多かった」という回答は全体で15.8%)
- ・休業中の研修が多くよかったという意見もあった。

3 (2) 研修の運営 [研修時間]



(2) 研修時間

- ・小学校教員の74.0%、中学校教員の85.7%が「適切」であったと答えている。(昨年度「適切」と回答したのは全体で66.3%)
- ・グループ討議でじっくり話し合いができたという意見が多く、昨年度に比べ1日研修が増えたことでゆとりのある研修になったと考えられる。
- ・午後半日の研修は、授業に与える影響が大きい。

小学校教員の声

- ・ 今までは総合的な学習の時間のめざすものに賛同していたものの、正直、年間時数をどう消化していくかと言うことに重きを置いて、その内容の質的な面の向上を図る努力が少なかったと思った。やはり初心に戻って、目の前の子どもをどう育てていくのかということから考えていくことが自分にとっては大切であると思った。特に第3回の講演で紹介されていた子どもたちの姿は私の目を開かせてくれたと思う。
- ・ 今回のような講座を受講して、「総合」は楽しい、本当に「生きる力」を育むのに適していると思った。しかし、現場に戻ると生徒指導に追われ、学力向上を求められ、教師も子どもも日々追われている現状があり、気が付くと1年終わってしまっていたとなっている現実がある。「こんな総合の学習をしたい」「子どもの変容を見たい」に一步でも近づけるよう一つのことからでも本研修で学んだことを生かしていきたいと思う。
- ・ 参加型研修の多いこの研修会は積極性が問われた研修会でもあったように思います。子どもに積極性を求める前に自ら子どもの立場を体験できたように思う。
- ・ 低学年担任がほとんどで実際に総合の授業をした経験が浅い自分としては大変参考になった。特に、同じ地域のグループや同じ学年のグループでの情報交換が参考になった。
- ・ 3学期の校内研修の中で、総合的な学習の時間の1年間をふり返り、その成果と課題を学年団ごとに話し合い、交流しておくこと、学習指導要領の改訂の動向を踏まえて来年度何をしていかなければならないか共通理解しておくことをとりいれていきたいと思う。
- ・ 本校は校内での全体計画や各学年の年間計画、単元構想、評価基準表、育てたい力の一覧などはしっかり見直し、改善している。今年度中に総合的な学習の時間の時間数の減少に伴った今後のカリキュラムの見直しを各学年団でまず実施していきたい。
- ・ グループごとに話し合う機会が多かったが、時間がたっぷりあって結構深まった話し合いができたように思う。他の学校の実践も聞け、また分からないところは質問でき、とても勉強になった。
- ・ 今回の講座で総合的な学習の時間の悩みや疑問点が近隣の学校の先生と話し合えて共通理解ができ、実のある研修となった。
- ・ 総合について自分自身十分理解しておらず、活動ありきであったが、今回系統立てて教わるのができた。お陰で子どもを変える、教師が変わる総合として考えていけるようになった。
- ・ 総合的な学習の時間の主任としてこの講座はとても意義のあるものになったが、主任＝コーディネーターとは少し違うし、学級担任をしながらコーディネーターは難しいところがあると感じた。(特に小さい学校は)しかし、とても系統立った講座で、自分なりによく理解できた。
- ・ 他校でも同じ悩みや問題があることを知り、今後の実践への励みともなった。さらに深く実践されている学校も知ることができたので、今後も資料等、情報交換ができればいいと思う。
- ・ なぜ総合的な学習の時間が大切なのかは分かったが、それでもなお残る課題がある。それは担当一人ではどうにもならないということだ。校内の体制を整備しないとうまく機能しない。様々な環境の中で自分ができることをやっていくことがとりあえずの第一歩だろうと思う。

- ・ 私自身は、1年担任でこれまで総合的な学習の時間を体験したこともなかったので本講座の受講はどれだけ学校や子どもたちにコーディネーターとして学んだことを返せるのか正直不安であった。この数ヶ月、本校での総合的な学習とは？とアンテナを立て、先生方の実践や子どものようす、地域の実態をふり返ったつもりである。この講座を受講できたことをチャンスと受け止め、自分なりにできることからやってみようと思う。
- ・ 先進校における授業参観などが実際にできると、より理解が深まると思う。
- ・ コーディネーターの役割、学校全体の組織、運営に関わる部分、外部との関わりについて、どのような役割を果たしていけばよいかなど、もっと大局的な見方ができるような研修を取り入れて欲しいと思う。
- ・ 個人カルテによる事例研究のような研修内容も悪くはないが、総合的な学習の時間のコーディネーターとして研修すべき内容、習得すべき技能、理論、情報などがあった方がよいと思う。
- ・ 地区別のグループで実践交流するのは意見が言いやすく、内容が深まってよかった。話し合いの中に価値ある話が多く出てきたのでこの活動に価値があったと思う。

中学校教員の声

- ・ 全体的な感想として、小学校の総合的な学習の時間の取組がよく理解できた。また、目標や意義とも合致しているのではないかと感じた。中学校の総合的な学習の時間の現状と問題点を把握し、小学校とは違うところの現実にあった改善のモデルを探っていかなければならない。
- ・ 今まで、総合的な学習に対しては「時間がかかる」「評価の仕方がよく分からない」との気持ちから、少し遠く考えていた。しかし、教科だけではその子どもの本来の姿を見ることはできない。総合的な学習の時間に子どもが活かされている実態も知ることができた。今後、この講座で学んだことを生かした取組を行っていきたい。
- ・ 現実の学校現場の状況から、総合的な学習の時間の実施の方法について検討の必要性を感じた。学校に持ち帰り、来年度の計画を立てるときから積極的に運営に参加し、話し合いを持ちたいと思う。
- ・ 現在の教員数でも充実した総合的な学習の時間を実現するのは難しいと感じる。しかし、何とかしなければ・・・という気持ちは失いたくない。小学校で育ててきた子どもたちを受け入れる中学校としてはその努力を無駄にしてはいけないと思う。
- ・ 学校内で運営の中心となって実際に行動できる人は限られており、まず総合的な学習の時間のねらいやメリットを多くの先生方に理解してもらうことが大切だと感じた。今回の講座のような一部の教員の研修ではなく、裾野を広げる研修を考えていただきたい。
- ・ グループ分けについて、学校規模が違いすぎると参考のできる部分が少ないことや、同郡市だと分かっている情報も多いので、異郡市別で規模の似通っている学校での編成をお願いしたい。
- ・ グループ編成は3回とも同じだったので、他の地域の先生方とも交流があってよいと思う。また、小中での実践がかなり違うのでテーマによっては小中別に分けたグループ編成も合ってもよかったのではないかな。
- ・ 個人カルテの作成については第1回の段階で示していただきたい。また、宿題の急な変更は時期的にも（通知表作成時期）どうかと思う。
- ・ 総合的な学習の時間がスタートしたときにこのような研修があればよかったと思う。